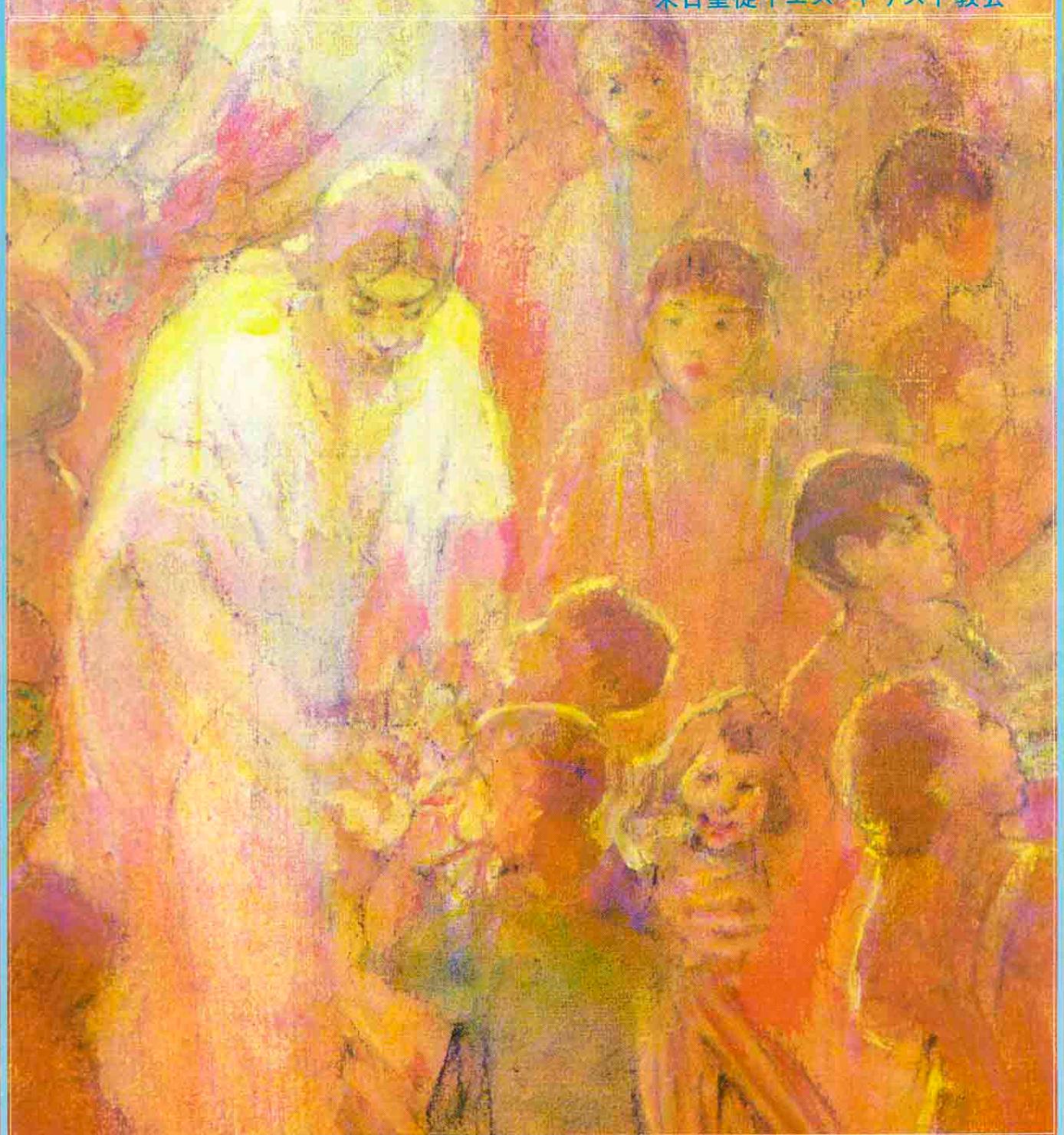


1988
10

聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道

1988年10月号

本書は「エンサン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクリー、トマス・S・モンソン

十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、トイド・K・パッカー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーウス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン

顧問：ヒュー・W・ビノック、ジーン・R・クラック、ウェーラム・R・ブラッドフォード、ジョージ・P・リー、キース・W・ワイルコックス

編集長：ヒュー・W・ビノック

教会機関誌ディレクター：ロナルド・L・ナイトン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチエル、アン・レムリン

制作：レジナルド・J・クリステンセン、シドニー・N・マクドナルド、ジェーン・アン・ケンプ、ティモシー・シェパード

マーケティング・マネージャー：トマス・L・ピーターソン

聖徒の道 1988年10月号第32巻第10号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社
定価 年間予約／海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通郵便150円、大会郵便350円

International Magazines PBMA 8810JA
Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1988 by the Corporation of the Presentation of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saint. All rights reserved.

●定期講読は、「聖徒の道」約申込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名／末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号／東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 03-440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配達についてのお問い合わせ…〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教會 資材管理部配達センター 0427-96-2820

The Seito no Michi is published monthly by the Corporation of the President of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saint. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$14.00 a year. \$ 1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, includ address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U. S. A. Subscription information telephone number 801-531-2947.

POSTMASTER: Send Address changes to "Seito no Michi" at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U. S. A.

●—もくじ

大管長会メッセージ

モルモン經	ゴードン・B・ヒンクリー	2
モルモン經が与えてくれたもの		
いかにして私の生活は変わったか	Th・G・バールマン	8
質疑応答	ジョージ・ライマン	10
	アレン・E・バージン	
子供と芸術—家族のための手引き		15
より良い生活をめざして	サン德拉・ウイリアムズ	19
末日聖徒の体験談		
答えを見つけるために	ポーラ・マイナー	23
エライジャのみたま	ルイス・ロベルト・デルターノ	25
信仰のオアシス	ジョセフ・B・プラット	27
アーサー・カーバルホ	ドン・L・サール	32
家庭訪問メッセージ		
「愛は、不義を喜ばないで真理を喜ぶ」		35
—若人のために—		
純潔の律法	エズラ・タフト・ベンソン	36
友人の死	ジョン・ベティー・フィッシュ	41
私たちは主の証し人です	ウォルド・プラット・コール	45
エンブレム	デビー・プリス・フォーダム	48

11月の大管長会メッセージ・家庭訪問メッセージ

各地のたより

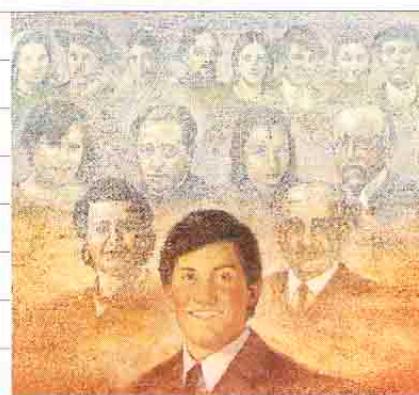
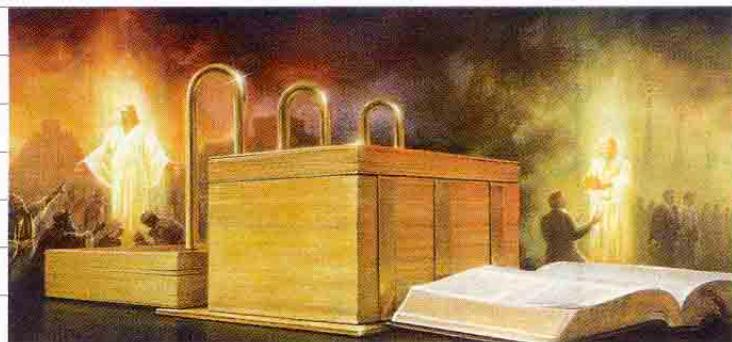
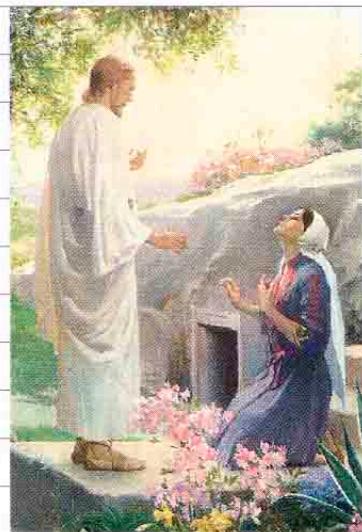
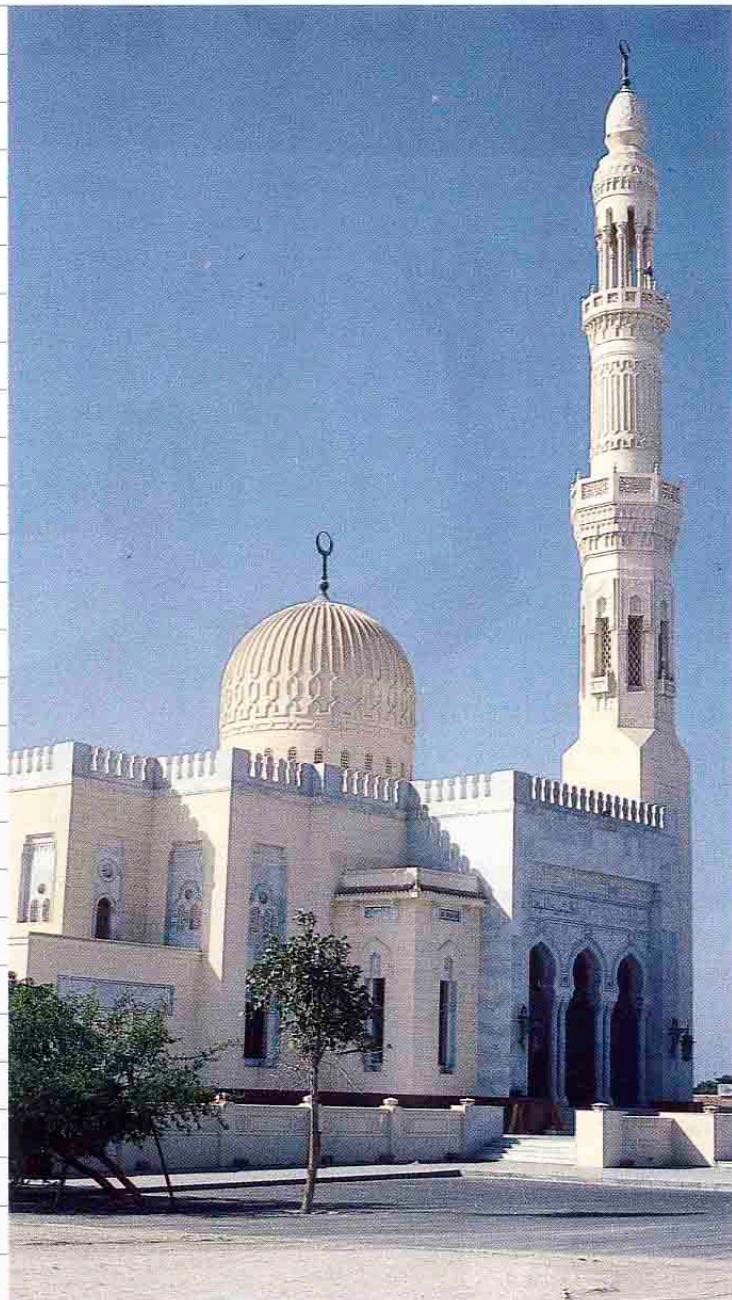
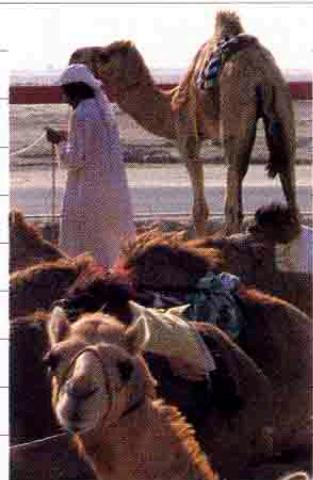
子供のページ(別冊付録)

いのり	2
信こうの石	4
ジェレドの兄弟	6
ナイジェリアの男の子	8



表紙：「あなたの子供たちを見なさい」

ミネルバ・ティーチャート画



モルモン經

第一副管長
ゴードン・B・ヒンクレー



私 たちは教会の集会でよく『長き沈黙破りて出づ』(讃美歌177番)という贊美歌を好んで歌いますが、これは百年以上も前にパーレー・P・プラット長老によって作詞されたものです。

長き沈黙 破りて出づ
上より降る 天使の声
見よとうとき記録 クモラに秘めらる
見よとうとき記録 クモラに秘めらる
(讃美歌177番)

プラット長老はこの贊美歌の中で、1冊の驚嘆すべき書物が奇跡的に世に出されたことを宣言しています。プラット長老とその書物の出会いの物語には非常に興味深いものがあります。

1830年8月、一介の説教師であったパーレー・P・プラットは、オハイオからニューヨーク州東部へ伝道の旅をしていました。彼は、ニューアークで、バプテスト教会の執事でヘムリンと名乗る人に出会いました。その人はプラットに、「世にもまれな、きわめてまれな1冊の書物」の話を

しました。「彼の話では、その書物は、イスラエルの末裔のひとりが金版か真鍮版に刻まれた記録をまとめたものだという。また、その版を発見して翻訳したのは、ニューヨーク州パルマイラの近くに住むひとりの青年で、示現によつて、すなわち天使の導きによってすべてが行なわれたということであった。そこで私がその人に、どうすればその書物を手に入れることができるかを尋ねると、明日自分の家に来れば見せると約束してくれた。……翌朝、彼の家を訪れた私は、そこで初めて、書物の中の書物、『モルモン經』を目にした。それこそ、神のみ手の中にあってその後の私の人生を大きく変えた書物であった。

私は早速その書物を開き、扉のページに目を通した。続いて、ジョセフ・スミスが金版を発見し、翻訳した次第を告げる見証者たちの証言を読んだ。それから私は、ニーファイ第一書に始まるその書物に1日中読みふけったのである。食事をする間も惜しく、夜が来ても寝るのが疎ましかった。読みふけって眠いとも思わなかった。

そのようにして読んでいると、主のみたまが私に下り、私はその書物が真実であることを知ったのである。人が自分の存在を認識するがごとくに、はっきりと一点の疑いもなく、私はその書物が真実であることを理解したのである。」(「パーレー・P・プラット自叙伝」pp.36-37)

当時、パーレー・P・プラットは23歳でした。モルモン經を読んで非常な感銘を受けた彼は、すぐさまバプテスマを受け、力強く福音を宣べ伝える宣教師となりました。彼の伝道の旅は、現在のアメリカ合衆国にとどまらず、カナダ、イギリスへと広がっていきました。また、太平洋の島々にも伝道の門戸を開いたほか、末日聖徒の長老として初めて南米の土を踏みました。しかし、1857年、アーカンソーで伝道中に、暗殺者の凶弾に倒れたのです。彼の遺体は、アーカンソーのアルマに近い農村の一角に葬られ、大きなみかけ石の墓石が今もその人となりを伝えています。この墓石には、予言を歌に託した彼の優れた作品のひとつが刻まれており、伝道の業に対する彼の思いをしのばせています。

夜あけだ 朝あけだ
シオンの旗掲げよ
あかるい夜あけだ
おこそか 嶽にあまねく
朝日は昇りゆく

聖い光の前に
過ちの雲は消える
栄光はあまねく
世界にひろがり
いまや輝かん
(『夜あけだ、朝あけだ』讃美歌189番)

モルモン經との出会いに始まるすばらしい経験は、決してパーレー・P・プラット長老だけのものではありません。初版のモルモン經の中には、人から人へと手渡されていったものがあります。そしてそれを読んだ人々の中には、心に深い感銘を受け、この世の一切の物を捨てた人も大勢いま



した。また、それから数年後には、少なからぬ人々が、この奇しき書物の真実性を証するために、みずからの命さえ投げ出しているのです。

時代を超えた真理

初版が刊行されてから158年たった今日、モルモン経はかつてなく多くの人々に読まれています。わずか5,000部に始

まるモルモン経の発行部数が、いまや百万部を超えるに至り、翻訳言語も70カ国語以上に及んでいます。

モルモン経は、永遠の真理であり、全人類のための書物です。また、神の力によってその記録の真実性がわかると約束されている唯一の書物でもあります。

モルモン経の起源は非常に神聖であり、初めての人にいきなり話してみても、信じてもらえない場合が多くあります。



す。しかし、モルモン経は確かに実在しています。だれもその事実を否定することはできません。

ジョセフ・スミスの言葉、またモルモン経の神聖な起源を否定しようと様々な画策がなされてきましたが、それらの努力はすべて徒労に終わっています。モルモン経は、古代アメリカの記録です。聖書が旧世界の聖典であるように、モルモン経は新世界の聖典です。そして、これらふたつの

聖典は互いに真実であることを証しており、人に確信を与え、改宗へと導く、靈感のみたまをもたらします。また、これらはともに手を携えて、イエスがキリストであり、生ける神の御子であって、すでに復活しておられることを証しています。

モルモン経には、すでに地上から姿を消した国家の歴史が書かれています。その中には現代の新聞紙上をにぎわす



様々な社会問題と相通するものが取りあげられていますが、それだけでなく、それらの問題に対する最も信頼の置ける解決策まで与えられているのです。

神の戒めに背いた社会がたどる悲劇の道をこれほど明確に書き記した書物を、私はほかに知りません。モルモン経には、西半球に栄えたふたつの相異なる文明のことが記されています。いずれの文明の場合も、最初は小さな国家から起り、人々は主を畏れながら各々の道を歩んでいました。しかし、国が栄えるにつれて悪が広がり始め、人々は、野心に燃えた狡猾な指導者たちの術策に陥ってしまいました。指導者たちは民に重税を課し、甘言を弄して欺き、ふしだらな生活を唱導しました。また、民を恐ろしい戦争に巻き込み、おびただしい人を死地に追いやりました。こうして、ふたつの偉大な文明は、時代は異なりこそすれ、この地上から完全に消滅してしまったのです。

この偉大なふたつの国家の歴史は、たとえ科学の力や学問、軍備があったとしても、民が正しくなければ、神のみ守りを受けることはできないということを教えています。神を畏れ、神の戒めに従う民と国家は栄え、発展することができます。しかし、神と神のみ言葉をないがしろにする人々の間には、墮落が生じ、正義をもってその歯止めをしない限り、人々は死に定められてしまうのです。この事実をかくも明解に説いた書物は、モルモン経をおいてほかにありません。旧約聖書の箴言にある次の聖句を、モルモン経ははっきりと裏づけています。「正義は國を高くし、罪は民をはずかしめる。」(箴言14:34)

偉大で感動的なメッセージ

モルモン経は、現代社会に影響を及ぼしているいろいろな事柄について力強く語っています。しかし、そのメッセージの主意は、イエスがキリストであり、約束されたメシヤであることを声高らかに証することにあります。イエスは土ぼこりの立つパレスチナの道を歩き、病人を癒し、救いの教義を説かれました。また、カルバリの十字架上で死に、3日後に墓からよみがえって、多くの人々の前にその姿を現わされました。さらに、前に告げておられたように、昇天前にこの西半球に住む民を訪れられたのです。主は先に次のように語っておられました。「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう。」(ヨハネ10:16)

何世紀もの間、ナザレ人イエスの神性を証する聖典は、聖書ただひとつしかありませんでした。しかし今やその傍らには、「ユダヤ人と異邦人とイエスは永遠の神なるキリスト」である(モルモン経、扉のページ参照)ことを力強く証する第二の聖典があるのです。

ここである人の改宗談を紹介したいと思います。彼は次のように言っています。

「私はあるすばらしい女性と交際していました。彼女の家を訪ねたときに、テーブルの上にモルモン経という本が置かれているのに気づきました。その本を見るのはまったく初めてでしたが、非常に興味をそそられました。そして、モルモン経を1冊手に入れ、最後まで読んでみました。

私は神やイエス・キリストについては、昔から教えられてきた知識があるだけで、別に深く考えたことはありませんでした。しかしモルモン経を読んでいくと、自分の心が永遠の真理に対する光と理解によって照らされ、神が私たちの永遠の御父であり、イエスが救い主であるということを強く確信するようになりました。」

この人のようにモルモン経によってその生活に影響を受けた人は、過去158年の間に数えきれないほど多くいます。

モルモン経はブリガム・ヤング、ウイラード・リチャーズ、オルソン・プラット、パーレー・P・プラットをはじめとする教会初期の多くの指導者を改宗に導きました。しかし今もなお、アルゼンチン、フィンランド、ガーナ、台湾など世界の至る所で、明確な目的と祈りをもって読む人々を福音に導いているのです。モロナイが民の滅亡の後に孤独な状態の中で書いたあの約束は、今もなお多くの人々によって成就されているのです。(モロナイ10:4-5参照)

真理への確信

私たちはモルモン経を読むように人々に勧めますが、それは彼らを愛しているからです。もし祈りと、真理を知りたいという心からの望みをもって読むなら、人々はモルモン経が真実の書物であることを、聖霊の力によって知ることができます。

またそれを知ることにより、ほかの多くの事柄の真実性についても確信が得られるようになります。モルモン経が真実であるならば、神は確かに実在します。モルモン経には、どのページを開いても、天父が実在のお方であり、私たち人間を愛し、その幸せを願っておられるという神聖な事実が証されています。

モルモン経が真実なら、イエスは神の御子であり、また御父が肉にあって生みたまいまどきの独り子、「どんな処女にも勝って美しくまた麗しい処女」と言われたマリヤから生まれたお方ということになります。(Iニーファイ11:13-21参照)なぜならモルモン経には、それらのことがほかのいかなる書物にも勝ってはっきりと証されているからです。

モルモン経が真実なら、イエスは確かに私たちの贍い主であり、世の救い主です。モルモン経が人々の目から隠され、後に世に出されたのには偉大なみこころがありました。それは「ユダヤ人と異邦人とイエスは永遠の神なるキリスト」である(モルモン経、扉のページ参照)ことを力強く証する第二の聖典があるのです。

ストにましまして、万国の民に現わされたもうことを確信させること」なのです。(モルモン經、扉のページ)

モルモン經が真実なら、ジョセフ・スミスは神の予言者です。なぜなら、ジョセフ・スミスは、主を証するこの書物を世に出すために、神のみ手の中でその器として働いた人だからです。

モルモン經が真実なら、エズラ・タフト・ベンソンは確かに真の予言者です。なぜなら、彼は末日の業を始めたジョセフ・スミスが神から授けられたすべての鍵、賜、権威、権能を受けているからです。

モルモン經が真実なら、この教会も真実です。この教会には、モルモン經を世に出したと同じ権能が存在するからです。この教会は、救い主がパレスチナで、またアメリカ大陸で組織されたのと同じ教会が回復されたものです。古代アメリカにおける教会の組織については、モルモン經そのものの中に記録されています。

予言の成就

モルモン經が真実なら、聖書も真実です。聖書は旧世界の民に対する契約の書であり、モルモン經は新世界の民に与えられた契約です。また、聖書はユダの民の記録であり、モルモン經はヨセフの民の記録です。このふたつの記録は、主のみ手の中でひとつに合わせられ、エゼキエルの予言を成就してきました。(エゼキエル37:19参照)聖書とモルモン經はともに手を携えて、救い主が世の王たるお方であることと、その王国の実在とを証しています。

モルモン經の中には、多くの人々の心の琴線に触れてきたメッセージがあります。祈りをもってモルモン經を読む人は、貧富の差や学問の有無に関係なく、その力によって成長することができます。

ここで何年か前に教会あてに送られてきた手紙を紹介したいと思います。その手紙には次のように書かれています。「私は今刑務所で服役中の者です。最近刑務所内の図書館でモルモン經という本を見つけました。読んでいくうちに、減んでいった人々へのモルモンの嘆きの言葉が書かれているところにきました。『美しい者たちよ。お前たちはなぜ主の道を離れたのか。美しい者たちよ。お前たちはなぜお前たちを抱えようとして両手をひろげたもうたイエスを拒んだのか。

見よ、お前たちはこれさえしなかったならば死ななかつたものを。しかしお前たちはもう死んでしまって、私はお前たちの亡いことを悲しみ歎いている。」(モルモン6:17-18)私はこれを読んだときに、モルモンが自分に語りかけているかのように感じました。この本をお送りいただければ幸いです。」

もちろん、私たちは彼にモルモン經を送りました。しばらくたって、彼は新たな人となって私のオフィスを訪ねて

きました。彼はモルモン經が持つ力によって生活を変え、今は社会的に立派に更生し、正直に働いて自分と家族の生活を支えています。

この偉大な書物には、祈りの気持ちをもって読む人々の生活をこのように変えていく力があるのです。

兄弟姉妹の皆さん、私は皆さんにはっきりと約束します。これまでに何度読んだかに関係なく、祈りの気持ちをもってモルモン經を読むなら、皆さんの家庭の中に、さらに豊かに主のみたまが注がれるようになります。そして、主の戒めに従って歩もうとする決意が強められ、神の御子が確かに生きてましますことがさらにはっきりとわかるようになるでしょう。□

ホームティーチャーへの提案

強調点: ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. パーレー・P・プラットは、モルモン經によって生活のすべてを変え、犠牲をもってその真実性を証してきた人々の模範である。
2. モルモン經の起源は非常に神聖な書物であり、神の力によってその記録の真実性がわかると約束されている唯一の書物である。
3. モルモン經の真実性に対する証は、ジョセフ・スミスの予言者としての召しや、この教会が神の教会であることなどをはじめ、ほかの多くの事柄の真実性についても確信を与えてくれる。
4. モルモン經は、聖書と同じように、イエスが神の御子キリストであり、復活されたお方であることを証している。
5. モルモン經には、現代の新聞をにぎわす様々な社会問題と相通するものが取りあげられているだけでなく、それらの問題に対する最も信頼の置ける解決策も与えられている。
6. これまでに何度も読んだかに関係なく、祈りの気持ちをもってモルモン經を読むなら、私たちの心と家庭の中に、さらに豊かにみたまが注がれるようになる。

話し合いを進めるために

1. モルモン經に対するあなたの気持ちを述べる。家族にモルモン經に対する彼らの気持ちを話してもらい、モルモン經を読み続けるように勧める。
2. このメッセージの中に家族で読んだり話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておいた方がよいだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。



M. Mann

モルモン経が与えてくれるもの

いかにして 私の生活は 変わったか

Th·G·バールマン

記 憶をたどってみると、私は常に神を探し求めていた
ように思います。しかもただ神の存在の可能性を信じてきましたのではありません。私には神が実在することはわかつっていましたし、神は漠然とした霊のようなものではなく、人間と同じような方であるという確信がありました。しかし實際にはどのような姿をしているのか、イメージがわいてこないのです。私の頭にあった神様は、やさしい笑みをたたえ、輝くような青い目をした白い巻き毛と髭の上品な老紳士でした。しかもその神様は、星の中に住んでいました。そして子供心に、星は神様の部屋の明かりだと思っていたのです。

地元のある教会からもらった祈りのカードから、私は神の御子イエス・キリストがどのような方なのかを知ることができました。そこには大きな輝く目をした、ウェーブがかかった茶色の髪の端整な顔立ちの救い主が描かれています。それは皮肉にも、ローマの兵士に槍で刺された痛々しい脇腹の傷を、釘跡の残るか細い手で指している絵でした。そして身を包んだ白い衣からは、救い主の愛の心を表す赤い光が放たれています。

私のこれまでの生活は、神や救い主とどんなかかわりを持ってきたのでしょうか。それは決して神に受け入れられるようなものではなかったことを認めざるを得ません。私はそれまで、主が禁じておられるようなことをほとんどすべて行なっていました。

月日がたち、私はひとりの美しい女性と結婚し、かわいい子供たちに恵まれました。また生活面でも、物質的に豊かで健康にも恵まれ、何不自由なく祝福された毎日を送つ

ていました。しかし私は、それまでの罪深い生活を思い、また主にはほとんど感謝することのない暮らしを思い、次第に自責の念にかられていきました。

ある晩、そうした思いにもはや耐えられなくなった私は、人里離れた所へ行き、心の思いをすべて主に吐き出したのです。私は赦しを請い、歩むべき道を知らせてくださるよう祈りました。実際のところ取るべき道はわかっていたのです。ただその道を完璧に歩んでいく勇気がなかっただけなのです。

私はそれまでも折に触れ、いわゆるその取るべき道を歩んで来ていました。たとえば、聖書を読み、自分なりに祈ってはいくつか教会を訪ね歩き、町角で説教している福音伝道者の人々の話に耳を傾けることもしばしばあったのです。

ある誠実な伝道者のリーダーが、私に、イエスのみもとに来て信じるようにと勧めてくれたことがありました。「ただそれだけでいいのです。イエスの血があなたを救い、あなたをあらゆる罪から清めてくれるでしょう。」そう彼は言いました。

それはあまりにも簡単なことでした。罪のあるまま主のみもとに行くことはできないということは私にもわかつっていました。しかし何よりもまず私に必要なのは、完全に清くなり二度と罪を犯さないようにするということでした。しかしどうすればそのようになれるのでしょうか。その方法がわからない私にとって、それはとてもむずかしいことでした。

しかし私は、そのことについて祈ったあとで、極力神に「親しく」近づくよう努めたのです。たとえば、マラキ書3章8節から10節の中の什分の一について読んでからは、自分の収入の10分の1を慈善団体に寄付するようになりました。

また行ないも努めて変えるようにしました。何事にも正直に、うそを言わないことにしたのです。また罵ったり、悪い言葉を使ったりしないようにもしました。またその間いろいろ不思議なことが起こって、私の生活は一層健康的な生活へと変わっていったのです。お酒を飲んでいたときのことですが、口にしていたお酒が突然泥水のような味になったのです。またコーヒーを飲んでいて気分が悪くなつたこともあります。またたばこへの愛着も、汚れた茶色の物体が、パイプを通って口から喉の方へ入り込んでくる生々しい夢を見て以来すっかり断ち切ることができました。

このようなことがあった後、私は偶然にも私立図書館の書庫を調べてモルモン経に出会ったのです。最初好奇心からモルモン経を読み出した私は、非常な興奮に包まれてしまいました。しかし残念ながら、図書館のメンバーで



質 疑 応 答

なった私は、その本を家に持ち帰ることができなかつたのです。

しかしモルモン経との出会いはそれが最後ではありませんでした。それから14日後、私はアメリカ人らしいアクセントのふたりの青年に出会つたのです。彼らのひとりにイエス・キリストを信じているかどうかを尋ねられた私は、信じるという段階を通り越し、確信していることを伝えました。すると彼は、手さげかばんから1冊の本を取り出し、私に読んでみるよう勧めてくれたのです。驚いたことに、それはモルモン経でした。

モルモン経を家に持ち帰つた私は、その後、ひどいインフルエンザにかかり、ベッドに縛りつけられることになりました。ベッドにいる間、私はずっとモルモン経を読み続けました。そして第二ニーファイの31章、32章に来たとき、私はついに長い間探し求めていたものを見つけたのです。そこには、狭くてまっすぐな道に至る門である悔い改めとバプテスマについて、また戒めを守ることについて、そして私たちの伴侶となつて助けを与えてくれる聖霊について書かれていました。それらの章を読んでいくうちに、私はモルモン経が真実であると確信するようになったのです。私は、もしこれが私にとってこの世に残された最後の経験だとしたら、バプテスマをぜひとも受けなければならぬという強い気持ちにかられました。同時に、バプテスマを受ける前にインフルエンザで死ぬようなことがあつたらどうしようという気持ちもありました。いずれにせよ、受ける必要のあるものならば、私はあのふたりの青年に家に来てもらい、家の浴槽でバプテスマを施してもらおうと決めたのです。

私は必死で宣教師たちの住所を探してみましたがわかりませんでした。ただわかっていたのは、近くにこの教会の小さな建物があるということだけでした。

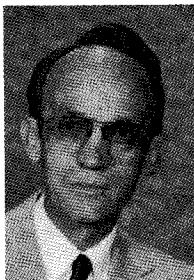
私の健康は間もなく快復しました。そしてある美しい春の朝、私はモルモン経を手にすると、ふたりの宣教師のところへ行き、できるだけ早くバプテスマを施してくれるよう頼んだのです。面接の中で、彼らは私が信仰や悔い改め、什分の一や知恵の言葉の戒めについての条件をすべて満たしていることを知りました。

こうして1977年5月28日、私はバプテスマを受けてキリストの真実の教会の会員となりました。そして初めのうちは少々疑問を持っていた妻も、その年の8月にはバプテスマを受けました。

私の改宗とバプテスマは決して偶然の出来事ではありません。主は確かに私をご自分の教会に導いてくださつたのです。またモルモン経は、私の改宗の決め手となりました。モルモン経を読むことによって、私は狭くてまっすぐな道に導かれました。そして今、私はその道を喜びをもって歩んでいるのです。□

本誌の答えは問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

末日聖徒イエス・キリスト教会が唯一真実の教会であることはわかりますが、他の宗教（信条）を信仰している善良な人々はどうなるのでしょうか。



回答者

ジョージ・ライマン

（ソルトレーケ大学第21ワード部監督）

天 父は、すべての人に栄光ある報いを得るすばらしい救いの計画を用意してくださいました。さらに、すべての人々はこの世にあって、靈界にあって、あるいはまた福千年の間に完全な福音を聞き、救いの儀式の祝福にあづかる機会を手にします。善良な人々がこれまでどうであったのかまた今後どうなるのかを知るには、まず救いの計画をよく理解しておかなければなりません。すなわち前世、現世、靈界、福千年そして天国についての知識が必要になつてきます。

前世

ある意味で、この世に生まれ来るすべての人々は善人であると言えます。まずこのことをよく理解しておかなければ

ばなりません。前世で、彼らは神の計画に従う方を選び、天の軍勢の3分の1が追放された天上の戦いでは神の側についたのです。(黙示12: 1-10, 教義と聖約29: 36-37, モーセ4: 1-4, アブラハム3: 22-28参照)

追放されなかった者たちは肉体を得、善悪を選ぶ自由意志をもってこの地上に来る機会を得ました。また彼らには、死を克服し、再び御父のみもとに帰るための神の教え、戒め、儀式などを含む福音を与えてくださる贖い主が約束されたのです。その神の計画とは、ひとつには人は罪のない状態で生まれてくること、(教義と聖約93: 38, 20: 71, 68: 27参照)もうひとつは彼らに真理とより大いなる福音の光に導くキリストの光が与えられる(ヨハネ1: 9, モロナイ7: 16-18, 教義と聖約84: 45-46参照)というものでした。

現世

したがって本質的には、天父は私たち一人一人の誕生を大いに祝福してくださっているのです。私たちには肉体が与えられ、善悪を選ぶ自由意志と導き手となるキリストの光が与えされました。さらに、誕生してから自分自身の罪に対して責任がとれるまでまったく汚れのない8年間という期間まで与えられました。

私たちにとっては現世そのものが実は驚くべき賜なのです。私たちはこの現世で痛みや悲しみ、死を経験しますが、同時に御父のみもとでは経験できないような様々な方法で靈的に成長する機会にあずかります。また罪を犯すこともありますが、キリストの贖いを通してそのような罪を克服し、天父が営んでおられるような生活をするのにふさわしいことを自分で証明することも可能なのです。

このような中で私たちは自分の運命を形作っていくわけですが、同時に問題をひとつ抱えることになります。すなわち、汚れたものは一切神の王国に受け入れられないという問題です。(エペソ5: 5, アルマ7: 21参照)私たちは皆罪を犯しますから、天父から断たれなければならないはずです。ところが天父は私たちに、天父のみもとに戻る方法を備えてくださったのです。ヨハネが記しているように「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも減びないで、永遠の命を得るため」(ヨハネ3: 16)なのです。

キリストの贖いにより私たちは悔い改めができ、キリストへの信仰を実践し神の戒めを守るという、バプテスマのときに交わした誓約を守ることによって罪が赦されるので

す。こうした誓約を守り、悔い改めをし、信仰を実践するときに私たちは聖靈の賜を受けます。そしてその賜によって、私たちは靈的にもっと成長し一層キリストに近づくのです。こうして福音の中で成長していくときに、永遠の結婚の儀式が私たちにとってより現実的なものとなり、その儀式によって私たちは自分の愛する家族と共に神のみ前で永遠に暮らせるのです。

それらすべての儀式は、地上の権威ある僕を通して愛ある天父により執行されます。末日聖徒イエス・キリスト教会の神権者である僕たちを通して神の力が表わされるのです。(教義と聖約84: 20-22参照)イエス・キリストは彼らを通して、全人類のためのご自身の救いのみ業を指示されます。彼らを通して、すべての神の息子、娘たちにこれらの偉大な賜を受け入れ、あるいは拒む機会が与えられるのです。

キリストについて聞いたこともない善良な人々が大勢いることから、それがどのような形で実現するのか疑問に思う人がいるかも知れません。また幼くして死んだ子供たちはどうでしょうか。彼らはどうなるのでしょうか。

靈界

予言者ジョセフ・スミスを通してこの神権時代に回復された良きおとずれは、救い主の計画によってこの世でなければ靈界ですべての人々に福音が伝えられるというものです。イエス・キリストはご自身の教会を組織され、地上で福音を伝える宣教師を選ばれただけでなく、亡くなった人々の靈が復活を待ち望んでいる靈界にも3日間留まられました。キリストはそこで、亡くなった人々が皆完全に福音を聞くことができるようみ業をなされたのです。(ヨハネ5: 25, Iペテロ3: 18-20, 4: 6, アルマ40: 11-14参照)

救い主はまた、死者のための神殿の儀式を定め、それによってすべての人々が救いの儀式にあずかれるよう配慮してくださいました。身代わりによって行なわれるほかの儀式同様に、死者のためのバプテスマは生きている私たちに先祖の身代わりとなってバプテスマを受ける機会を提供してくれています。私たちはすべての者が福音を聞き、すべての者が救いの儀式にあずかる機会を手にするという約束を受けています。

したがって、私たちにはキリストがこの世に来られる以前にこの世に生きていた善良な人々は、現世で受け入れることがなかつたにせよ靈界で福音を受け入れることができ

るということがわかります。同様に、救い主の時代以後に生きてきた善良な人々にも、靈界で完全に説かれた福音を聞き、その福音と地上で彼らの代わりに行なわれる救いの儀式を受け入れる機会があるのです。

復活と福千年

多くの人々にとって、復活は喜びのときです。イエス・キリストは、地上の善良な民は福千年の初めに義人として復活すると約束してくださいます。(ヨハネ5：29参照) 自分自身もしくは身代わりによりバプテスマの水をくぐってキリストを受け入れ、戒めを守った人々は、救い主の再臨の際に共に復活するのです。(Iコリント15：22-23、黙示20：4-6、教義と聖約76：50-70参照) バプテスマを受けずに亡くなった幼児もこのときに復活し、永遠の生命を受け継ぎます。この世で福音は拒んでも正しい立派な生活をした人々は、福千年が始まって間もなく復活します。この中には、イエスの雄々しい証し人にはなれなかつたものの、清い立派な生活を送った末日聖徒も含まれます。(モーサヤ15：24-25、モロナイ8：22、教義と聖約45：54、76：71-79、88：97-99参照) サタンが縛られる1千年の間、これらの人々はイエス・キリストご自身により直々に導きを受けることになるのです。(黙示20：1-6、教義と聖約45：58、59参照)

福千年の終わりには、正しくない者の復活が起こります。この復活は、福音を決して受け入れようとしない者、(神の戒めを知っているながら守ろうとしない) 罪にとどまっている者などすべての邪悪な者たちの復活です。(教義と聖約76：81-82、モーサヤ15：26参照) そして最後の復活は、主のみ力を十分に知りそのみ力にあざかりながら真理に背き、聖いみたまの証に背く罪を犯し、サタンの反逆に加わるために神のみ力を拒んだ滅びの子たちの復活です。彼らだけが悪魔とその使いたちと共に永久に追放されることになるのです。(教義と聖約76：31-43参照)

サタンはここで解放され、邪悪な者を集め、裁きの日が来る前に義人に対抗して戦いを挑みます。(黙示20：7-9、教義と聖約88：110-116参照) そこで善良な人々は、サタンに立ち向かうミカエルの側につき、神が悪に対して完全な勝利を収めるのを目にして。(この戦いにおいては、もはや「他の宗教を持っている善良な民」といった表現は必要なくなります。なぜならすべての人はそれまでにキリストの側につくか、反対にキリストに背くかのどちらかに分かれているからです。)

裁きの日と天国

では大いなる審判の日には、この世の善良な人々に何が起こるのでしょうか。それまでに主の教会の会員となった人々はすべて「天国」へ行き、教会に加わっていない人々は「地獄」へ行くのでしょうか。肉体の死の後の生活について救い主は、御父の家にはたくさんの住まいがあり、日の光栄、月の光栄、星の光栄という3つの光栄があると教えておられます。(ヨハネ14：2-3、Iコリント15：41、教義と聖約76：96-98参照) 最も低い光栄である星の光栄でさえ、「人智の計り知らざるもの」(教義と聖約76：89)なのです。

主は、すべての人々は裁かれ、各自の働きや心の望み、信仰に応じて光栄を受けると約束しておられます。日の光栄に入る人々は、御父と御子にまみえることができます。

(教義と聖約76：62参照) また月の光栄に入る人々は御子とまみえ、星の光栄に入る人々は聖きみたまの教えとこの王国に遣わされた天使による教えと導きを受けるのです。

(教義と聖約76：77-78、86-88参照) ただし滅びの子だけは、これらいずれの光栄にも入ることができません。

救いの計画

確かに、神とイエス・キリストの愛は私たちの思いを超えた偉大なものです。援助を差し伸べ裁きを下すうえで、これほどまでに私たちに寛大で、忍耐強く思いやりあるお方はほかにおられるでしょうか。救いの計画は、これまで生きてきた人々現在生きている人々、そしてこれから生まれてくるすべての人々に差し伸べられています。この世での立場や状況によって人を拒むようなことはなく、すべての人々に神の王国の最も大いなるものを受けれる機会を与えてくれます。信じる者にも信じない者にも、またイエス・キリストについて一度も耳にしたことのない者にも同様に機会を与えてくれるので。神はこのようにして、私たちを深く愛していることを示してくださっているのです。

ニーファイが言っているように、主なる神は「人間の中でためになることを為したまい、人間に明らかでなければ何事もなしたまわづ、万人が主の御許へ来て主のめぐみにあずかるように招きたもうている。それであるから、主の御許へ来る者は黒人と白人、奴隸と自由人、男と女の区別なく誰を拒みたもうこともない。また主は異教徒さえもかえりみたもうから、神の御前にはユダヤ人も異邦人もみな平等」(IIニーファイ26：33)なのです。

私たちは、義人にとって靈界は安息の場であると教えられています。では幼児虐待などによって受ける心の傷はどうでしょうか。そのような人の中には、受けた心の傷を一生引きずっている人もいます。こうした人は、死後も心の痛手を克服するためにつらい思いをしなければならないのでしょうか。



回答者

アレン・E・バージン

(ブリガム・ヤング大学心理学教授
ブリガム・ヤング大学第11ステーキ部、
副ステーキ部長)

世の多くの人々は、他人の悪事に起因する情緒的、精神的問題に苦しめられ悩まされています。肉体や精神的な虐待、あるいは性的虐待によって引き起こされた子供のこのような問題は、親の手による場合はなおさらのこと、あとあとまで（大人になるまで）消えることがありません。

精神的、情緒的痛手の原因となるものはほかにもあります。科学者は、精神上の疾患は、身体の生化学上の欠陥によって引き起こされることが多いと指摘しています。麻薬やアルコールを常用している母親から生まれた幼児の薬物、アルコール依存症は、その端的な例です。重度の精神障害や慢性の精神分裂症もまた、心身に長期にわたる影響を及ぼし、自分にはどうすることもできないいくつかの生化学上の因子によって引き起こされるものです。

私たちは、環境や生活が、あるいはその双方が精神面の健康や正常な行動を害っている堕落した世界に住んでいます。ジェームス・E・タルメージ長老はこのように述べています。「小児たちはその両親の善い性質または悪い性質をある程度まで受けついで生まれ、遺伝の結果が認められる。善惡の傾向、祝福とのろいなどは代々伝わるものである……アダムの子らは『死すべきこと』という悪を生来受けついだ者である。しかしながら、キリストの『贖罪』により人類は、この堕落というのろいの状態から全部贖われる。」（信仰箇条の研究p.114）

のことから、人から情緒的痛手を受けた人々は、贖いにより、死後それらの痛手から解放されると考えられます。身体上の欠陥によって引き起こされたものであろうと外部からのストレスによるものであろうと関係なく、パラダイスに入る人がそのような平安と安らぎを得ることになっているとすれば、そうした異常な状態から解放されることはぜひとも必要なことです。（モーサヤ3：11、アルマ40：11-14参照）

主は確かに義のお方です。主は、ご自分の子供たちが他人の悪事によって傷つけられた事実を考慮し、思いやりを示してくださいましょうし、試しのこの世を越えてまでもご自分の子供たちを悩まし続けるようなことはなさらないはずです。

もちろんこれは、自分自身の力で生活を変えていく能力を持っている人々が責任逃がれに理屈を並べ、自分の身に振りかかった問題に手をこまねいていてもよいというではありません。私たちは、主が「いささかも罪を見逃したまわない」（アルマ45：16）ことを知っているはずです。

例をあげてみましょう。生化学的な問題と環境の双方が誘因となる同性愛の性癖に悩んでいる人がいるとします。

子供と芸術

福音では、そのような人々にもしっかりと自己修養し、生活を変えてそうした性癖を克服するよう、最大の努力を求めていきます。かつて同性愛に耽っていた多くの人々がそのような努力をし、すばらしい結婚生活を築いているという事実は、たとえどんなにむずかしくても、人はそのような問題を克服し、福音の原則に沿った生活ができるということの証明です。

これと同じ原則が、性的虐待や薬物、アルコールの乱用、過食や暴力など他の多くの問題にも当てはまります。そのような問題がすぐに永久的に改善されることはむずかしいかもしれません、情緒的、精神的問題に悩む多くの人々は、みたまの導きと専門家のカウンセリングそして自分自身の努力によって、すばらしい進歩を見ることができます。思うような進歩が見られないのは、精神障害や精神錯乱など極端な場合だけです。

私たちは重大な病的疾患を、人間の弱点と混同しないよう十分に注意する必要があります。私たちに何の弱点もなかったら、この世は試しの世ではなくなり、神の救いの計画は挫折してしまうでしょう。主はこのように言われました。「われは人を謙遜にするために人に弱点を与うれど……かれらがわが前にへりくだりわれを信ずる時にはその弱きを強きに変えん。」(イテル12:27)

私たちはみずからの靈を鍛え、内的、外的双方の苦難に対抗することによって靈的に強められていきます。主ご自身が幼児虐待などの悪を生じさせることは決してあり得ません。しかし、ご自分の子供たちの自由意志と責任を守るために、子供たちに（自分自身の行ないの結果であろうと他人の行ないの結果であろうと関係なく）自由意志の誤用の結果を知らしめ、その苦痛を経験させられるのです。

この世で受ける傷を克服するために、私たちにできることはまだまだたくさんあります。もし私たちがキリストのみもとに来て、私たちを傷つけた人々を赦すならば、わずかではあっても解放感を味わうに違いありません。確かに主は私たちに、傷つける人々を赦すように望んでおられるのです。憎しみの重荷から解放されたとき、私たちは贖いを通して「終りの日に……善い状態へ復」(アルマ41:3)されるようふさわしく生きる力を手にすることができます。□

生 活の中にあって、芸術は私たちの美に対する基本的欲求を満たしてくれるものです。努めて芸術に心を向ける家族は、豊かな家庭生活を送ることができます。芸術を通して、私たちは人々を鼓舞し、教え、啓発することができます。

しかし、芸術には、人によって自然に受け入れられるものとそうでないものがあります。したがって子供たちには、文学、音楽、絵画、彫刻、演劇、ダンスなどのいずれに最も魅力を感じるかを考える機会を与えてください。教会の基本的な教義によれば、私たちはすべての賜を兼ね備えているわけではありません。(教義と聖約46:11参照)リズム感や歌唱力、完璧な音感、話術、均整のとれた肢体、これらはどれも賜です。私たちにすべての賜は与えられていないかもしれません、未開発の賜は必ずあるはずです。「すべての神の娘、息子たちは何らかの才能を持っている。」ジョセフ・F・スミス大管長はそう言っています。(「ジュニナル・インストラクター 1903年11月号p.689)

どの子供も創造性を持っています。ですから私たちは自分の子供がそれぞれ独自の方法でそうした力を発揮していくように助けてあげなければなりません。見たことや感じたことを文章や音楽、絵、踊りなどで表現するように勧めることは、子供たちに自分自身について知る機会を与えることになります。子供たちはまた、伝統的な物語や音楽、踊りなどに親しく接することにより、文化遺産を身近に知ることができます。

それぞれの子供の才能や能力を知っていると、各分野で彼らがさらに伸びていけるよう様々な機会を提供してあげることができます。どの子供にもその子なりの賜が与えられているはずです。ですから、子供たちは皆同じ才能を持ち、みんなが同じようにその才能を発揮するはずだという親の期待ほど、子供たちが創造性を自由に伸ばしていく妨げとなるものはないのです。両親は、それぞれの子供の賜

—— 家族のための手引き



両親は、それぞれの子供の賜が何であるかと一緒に見極めてあげることが大切です。その過程で得られる教訓は、その子供の人生のあらゆる面に良い影響を及ぼします。

が何であるかと一緒に見極めてあげることが大切です。その後、成長の機会や、才能を伸ばし磨いていく場を見つけてあげるのであります。

それには往々にして犠牲と実践が求められます。しかし才能を発揮するたびに、子供たちの能力は高められるのです。またその過程で得られる教訓は、その子供の人生のあらゆる面に良い影響を及ぼします。

文学

人々は昔ほど読書をしなくなりました。私たちの子供も例外ではなく、読書にいそしむ姿は期待できそうにありません。ですから、子供たちには小さいうちから読書の習慣を身につけさせることが大切になってきます。まず子供をひざに抱き、たとえ本を持ったり、ページをめくったりできなくても、声を出して読んであげることが大切です。そうすることによって、子供たちに言葉の持つ響きやリズム、話の流れなどを伝えることができます。またそうすることで、新しい概念に対する子供たちの興味がそそられるはずです。

子供たちに本を読んであげることは、子供たちの注意力を高め、語彙を増やすことになります。またそうすることで子供たちは本に対して好感を持つようになります。また親子の絆も強まり、子供たちは正しい判断ができるようになると同時に、道徳的価値や常識を学んでいくのです。

何よりも、子供と一緒に声を出して本を読むことは楽しいことですし、そうすることは子供たちの能力に自信をつけさせることになります。その点、演劇や詩は特に効果があります。ある家庭では、家庭の夕べの開会と閉会に、子供たちが文学の中の思い出深い一節を交代で読み、なぜそれが好きなのか話をすようにしています。十二使徒定員会のマービン・J・アシュトン長老は、両親に次のように勧告しています。「良い読書は子供の枕元に始まる。一日の

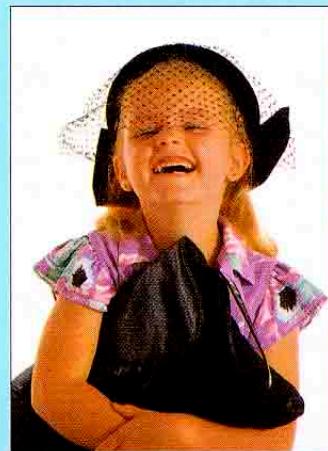
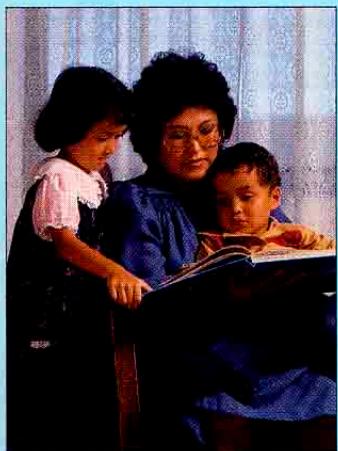
終わりにベッドの傍らで健全な書物を読んであげられないほど忙しくしてはならない。児童文学の中から、子供たちに気高い理想を抱かせる有益な話を選んでいただきたい……寝る前に両親に抱かれて本を読んでもらい、一緒にひざまずいて祈る子供たちと、テレビの暴力番組を見て寝る子供たちの違いを考えていただきたい。」（「最高の評価」聖徒の道1978年2月号、p.111）

書くことは、かなり小さい子供でもできます。その一番簡単な方法は、日記をつけたり、親戚や友人に手紙を書くよう勧めることでしょう。ほかの才能と同様に、物を書くという才能は練習によって上達していきます。一緒に座って物語を読み、子供たち一人一人にその物語の一部を考えさせるのです。必ずや子供たちの創造性の豊かさに驚かされるはずです。

音楽

音楽は世界の言葉です。良い音楽は人々をひとつに結び、自己表現の一手段となります。同様に、私たちの家庭においても良い音楽は家族全体に良い雰囲気をもたらしてくれます。音楽は、家族がいろいろな経験を重ねていくうえで、ふさわしいムード作りをしてくれます。家庭の夕べや福音の勉強の時間は、ふさわしい音楽の伴奏によってさらに有意義なものとなり、家族の祈りの前に歌う讃美歌は、その場に集う人々にみたまを注いでくれるでしょう。

家族がどんな音楽を聞いているか、ぜひ注意を払ってみてください。それぞれの音楽の価値について話し合うことも大切です。若者たちに、ロック音楽を聞くな、などと言うのではなく、もっと肯定的な方法を考えてみましょう。子供たちと一緒にどんな音楽があるかを挙げてみて、家族がそれらの音楽をどれだけ聴いているのかを話し合ってみるのです。数週間、子供たちにいつも聞いている音楽ではなくほかの分野の音楽を聞くように提案してみてください。



特に小さいころによく歌を歌ってもらった子供というの
は、歌うことが好きなものです。音楽による表現には、音
楽を聞くことや楽器を演奏することも入ります。

両親が良い音楽を尊重する家庭で育った子供は、必然的に良い音楽を好むものです。

視覚芸術

私たちは、教会の指導者からしばしば環境を美しく整えるよう勧められてきました。家の壁に美しい絵や写真を飾ることもひとつ的方法です。また家族の写真や神殿、予言者の写真、救い主の絵などを置くことによって家庭に福音の教えを反映させることができます。福音を題材とした美術品は、永遠の原則がどんなものかを日々思い起こさせてくれる偉大な教師になります。

子供たちも自分で作品を作り、それを飾ることによって環境の美化に加わることができます。子供は、鉛筆やペン、クレヨンが持てるようになると、たちまち書くことに興味を示します。褒めながら教えていけば、どの子も皆見たままの世界を上手に楽しく書けるようになるでしょう。

演劇、ダンス

音楽やダンス、演劇はどの文化にも見られます。多くの地域で、学校や大学、地元の団体などによるすばらしい演劇プログラムが組まれ、提供されています。家族にとっても、映画に行くより演劇鑑賞の方がはるかに価値のある場合があるのです。テレビでもまた、家族がそろって劇やバレー、オペラなどを楽しむことができます。

子供というのは、何かにつけ役を演じたり、^{ふんそう}扮装したりするのが好きです。家庭のタベなどで、福音に関連した物語を演じさせることによって、そのような機会を与えてあげられます。子供たちはまた、音楽に合わせて踊ることも

好きです。

芸術と福音

芸術という言葉は、その名に値しないようなものにまで用いられてきています。では私たちは家族として、芸術の良し悪しをどのようにして見分けられるでしょうか。悪い芸術は、必ずしもすぐにその場で私たちの気分を害するわけではありません。作品の言わんとすることがわかって初めて、私たちはその芸術がいかに福音に反するものであるかがわかるのです。私たちは常々、福音という観点から芸術を評価するように心掛けるとよいでしょう。

芸術は信仰と希望を表現することもあれば、罪や絶望感を助長することもあります。つまり神を賛美することもできれば、神を退けることもできるのです。私たちが様々な文化の芸術に触れ、自分自身をまた子供たちを訓練していくなければ、私たちの美的表現能力は貧弱になり、芸術に対する識別能力を、すなわち美德と不徳を、立派なものとそうでないものを、また高潔なものと下劣なものを区別する能力を欠いてしまうでしょう。

芸術鑑賞を勧める

家族との話し合いの中で、どのようにすれば家庭で芸術に対する鑑賞力そして表現力を高めていくかを考えてみてください。それは、子供たちにとって自分の生活に美をどのように取り入れていったらよいかを知る最良の機会となるでしょう。芸術鑑賞について考えれば考えるほどその能力は高められますし、より上手になるはずです。彼らに必要なのはほかでもない、この世に持って生まれた創造性を發揮し、満たすための時間であり素材であり励ましなのです。□

タイの朝の蒸すような暑さの中で、聖任されたばかりの長老は、小屋のざらざらしたコンクリートの床から膝を守るために敷いた古新聞の上にひざまずきました。彼は着古した白いシャツに古いネクタイを締め、サンダル履きのまま敬虔な面持ちでパンを裂き、それを祝福しました。タック・ホングは聖餐の儀式に参加できることはもちろん、生きていられることに深く感謝しているのです。彼は最近、家族を戦禍の中のベトナム、カンボジアから救い出し、自由と安全の約束されたタイのパナ・ニコンにある国連の避難キャンプに連れてきたのです。

キャンプに到着した最初の日、タック兄弟は教会の福祉宣教師のエライス・ジョーンズ姉妹に、カンボジア人がする伝統的なおじぎではなく、握手を求めて彼女を驚かせました。彼は自分が教会員となり、アロン神権を授かったことを彼女に話しました。彼女にとってそれは実にうれしい知らせでした。福祉宣教師たちは、難民に西洋文化と英語

を教える任務だけを受けてきているため、伝道活動は国連の方針に反することでした。しかし認められた範囲内で、難民の教会員たちにも日曜礼拝を含む教会の行事を行なうことが許されました。

タック兄弟のことを知ったジョーンズ姉妹とほかの福祉宣教師たちは、まず七十人第一定期会のマリオン・D・ハンクス長老に、そして東南アジアの教会管理者に連絡を取り、キャンプにアロン神権者が来たことを伝えました。面接の後、ハンクス長老はタック・ホングを長老の職に聖任しました。ジョーンズ姉妹はこう語っています。「タック兄弟はキャンプでの最初の神権者となりました。彼が聖任したことによって、日曜日に礼拝行事ができるようになりました。」

活字に支えられて

タック兄弟は、南ベトナムの空軍訓練の任務を受けて合

より良い生活をめざして

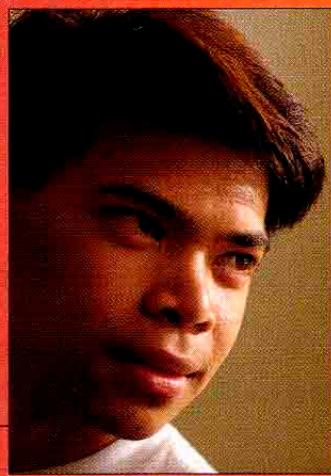
サンドラ・ウイリアムズ





衆国に行った1971年に教会に入りました。末日聖徒と友達になった彼は、教会の集会に出席するようになり、ほどなく宣教師のレッスンを受け、バプテスマを受けました。その後9ヶ月たって、ベトナムに戻る途中、彼は聖典の入ったスーツケースを盗まれてしまいました。当時ベトナムの

首都には支部があったのですが、彼はそのことを知りませんでした。しかし彼は、「エンサイン」という英語の教会機関誌を1年分もらっていました。その機関誌を12冊丹念に読み返すことによって、彼はその後の10年間、自分の靈性を支えてきました。ベトナムで政権の交替があり、外国の



印刷物に嫌疑がかけられると、彼は今まで以上に「エンサン」を大切にし、それを安全な場所に隠しました。

ベトナムを去り、難民キャンプに着いた彼は、「エンサン」の発行元に手紙を出し、その手紙をアメリカにいる末日聖徒の友人に転送してくれるよう頼みました。こうして友人の居所がわかり、タック兄弟は彼と連絡を取り合うようになりました。そしてタック兄弟がアメリカに移民することになったとき、その友人がスポンサーになってくれたのです。

タック・ホングは、より良い生活を求めてインドシナをあとにした大勢のベトナム人、カンボジア人、ラオス人の中のひとりです。途中たくさんの人々がその試みに失敗し、命を落としています。

多くは、嵐や海賊の襲来、飢えや脱水状態に見舞われる前に、心ある船が援助の手を差し伸べてくれることを願つて、多額のお金を払って小さな破損した満員の船に乗り込み、脱出を計りました。

またタック兄弟のように、捕らわれたり命を落としたりすることを覚悟のうえで、南ベトナムからカンボジアを通って北方へ、中立のタイへと脱出を試みた人もいます。タック兄弟の場合は、妻のミンダン、3歳の娘ミンバンそして8歳になる甥のサンハを伴つての脱出でした。タック兄弟はこう話しています。「サンハの父親は、妻と6人の子供を抱えていて、ベトナムを脱出するのに必要なお金が払えなかったのです。私は彼からこの子を託されたのです。彼らにとてそれは、長男と共にいることをあきらめることになりましたが、少なくともひとりだけには自由を与えてあげられたわけです。」

カンボジアを通つての脱出は、「案内人」つきで行なわれました。その案内人を雇うために、18カ月分の給料に相当する1テールを払うことになりました。タック兄弟はお金を得るために熱心に働き、当局にあやしまれないように密かに資金を蓄えました。こうしてやつとのことで準備が整うと、粗末な家財道具を親戚や友人に売り払い、一家は1981年3月の月のない暗い晩に、故郷をあとにしたのです。

祈りはこたえられた

タック兄弟は、自分たちの祈りがこたえられたと確信しています。彼らはベトナム人でしたが、彼も妻も共にカンボジア人の血を引いており、道中はカンボジア人を装っていました。「でもいつもうまくいったわけではありません。妻はカンボジア人の服装をしていたのですが、ある日、彼女の着ているサロンがカンボジア人らしくなく、ベトナム人のように見えるということで問い合わせられたことがあります。ふたつの国は同じような文化的背景を持った国ですが、サロンのスタイルと身に着け方には微妙な違いがあったのです。しかしどうにかこうにか切り抜け、旅を続け

ることができました。」

また何度か兵士に呼び止められることもありましたが、その都度小さな奇跡が起きて、無事に切り抜けることができました。タック兄弟はこう話しています。「ふたりの警備兵の待ち受ける検問所で呼び止められたことがありました。彼らのひとりはカンボジア人でもうひとりはベトナム人でした。どういうわけかそのベトナム人兵士は私たちに背を向け、話しかけてこなかつたのです。私たちはカンボジア人兵士に身分証明書の提示を求められました。私はどこから来てどこへ行こうとしているのか一部始終を話すつもりでいました。ところが彼はとがめることなく私たちを通過させてくれたのです。もしベトナム人兵士だったらそうはいかず、きっと引き止められていたに違いありません。」

彼らの家族はまた強盗に襲われそうになつたり、軍の小ぜり合いに巻き込まれそうになつたりという危機を乗り越えながら、あるときは荷物を山積みにした旧式のバスで、あるいは自転車で、牛車で、そしてまた列車でと、タイとカンボジアの国境の南バダバングまで旅を續けました。

彼らを乗せた列車は、地雷で破損した線路の補修のため停車することもたびたびでした。タック兄弟はこう語っています。「線路の補修は、まず列車の乗客が客車から機関車を切り離し、それで重い貨車を押して不発の地雷がないかを確かめながら行なわれるのです。そのために非常に時間がかかり、乗客は食べ物を持たないまま立ち往生することを恐れたものです。」

タック兄弟は、線路の補修のために止まったときのことを次のように話しています。「私は列車を降りると離れた所へ行き、家族のために食べ物が見つかるようにと主に祈りました。家族の者たちはしばらくろくなものを口にしていなかつたのです。2キロほど歩いて行くと、ある村に出ました。私はその村の外れの家を訪ね、そこの奥さんに食料を売つもらえないか頼んでみたのです。すると彼女は御飯を炊いて、それをバナナの皮に詰め、塩をひとつまみふると私に渡してくれました。」彼は主に感謝し、お金を払うと、妻とふたりのお腹をすかせた子供たちのところへそれを持っていきました。

こうして彼らはやつとのことでバダバングの難民キャンプに着きました。しかしそこはカンボジア領内だったので、タック兄弟はもっと安全なタイのパナ・ニコンのキャンプに移してもらいました。着いたのは5月で、ベトナムを離れてすでに2カ月もたっていました。その後、彼らはタイからアメリカに移り、妻のミンダン・タックがバプテスマを受けました。彼女は現在、ユタ州セントラルステーキ部、ティラーズビル第40支部（ベトナム人支部）の扶助協会の副会長をしています。また支部長会の第2副支部長の職にあるタック兄弟は、ユタ州に製造工場と事務所を持つ、国営の工学調査会社の電子検査技師として働いています。□

末日聖徒の体験談

答えを見つけるために

ポーラ・マイナー

私は13年間、献身的なクリスチャンであり、同じくら
い献身的な反モルモンでした。組織された福音主義
のプログラムのひとつとして、店で、公園で、そして家々
で、私は「福音の良きおとずれ」を分かち合うために人々
に話しかけました。

私が福音主義のために働きながら出会った人の多くは末
日聖徒でした。私はあらゆる機会をつかまえて、彼らの教
会が神のものではなく、サタンによってそそのかされた信
仰であると話しました。私は反モルモンの出版物に精通し
ており、「誤った導きを受けているモルモン」のために心を
痛めしていました。彼らは、ジョセフ・スミスという自称予
言者の言葉を信じ、天国への道を得ようと自分たちの信仰の
「実践」にやっきとなっていました。

私は彼らに何度も何度もそうした「実践」は意味がない
ことを話しました。イエスを心の中に求めるものだけが天国へ行
き、ほかの人は皆、善人も悪人も、神から永遠に断
ち切られ、苦悩の運命をともにするのです。

「イエスについて聞かなかつた人々はどうなるのですか」と
いつも尋ねられましたが、答えようともせず黙ってその
質問を無視しました。

とても大変だった離婚の後、私は教会へ行くのをやめま
した。神への信仰と愛はありました、生活の中の靈的な
部分はしばらくそつとしておくことにしました。その後私は、
教会へは出席していないものの、確固たる証をもつた
末日聖徒と再婚しました。私たちはめったに宗教について
は話し合いませんでしたが、その話題があがるたびに、彼
の信じていることが間違っていることを示そうと、いろいろ試
みましたが無駄でした。彼は静かに耳を傾けてはいましたが、
彼の信仰は、まったく変わりませんでした。そして、家族の重大な危機を通じて、私の心は変わり始めたの
です。

私の義理の父は、癌が悪化し始め、死期が近づくにつれ、
教会の大切さを子供たちに伝える必要があると感じました。
彼の簡潔な証は、私の心に触れました。そして、この教会

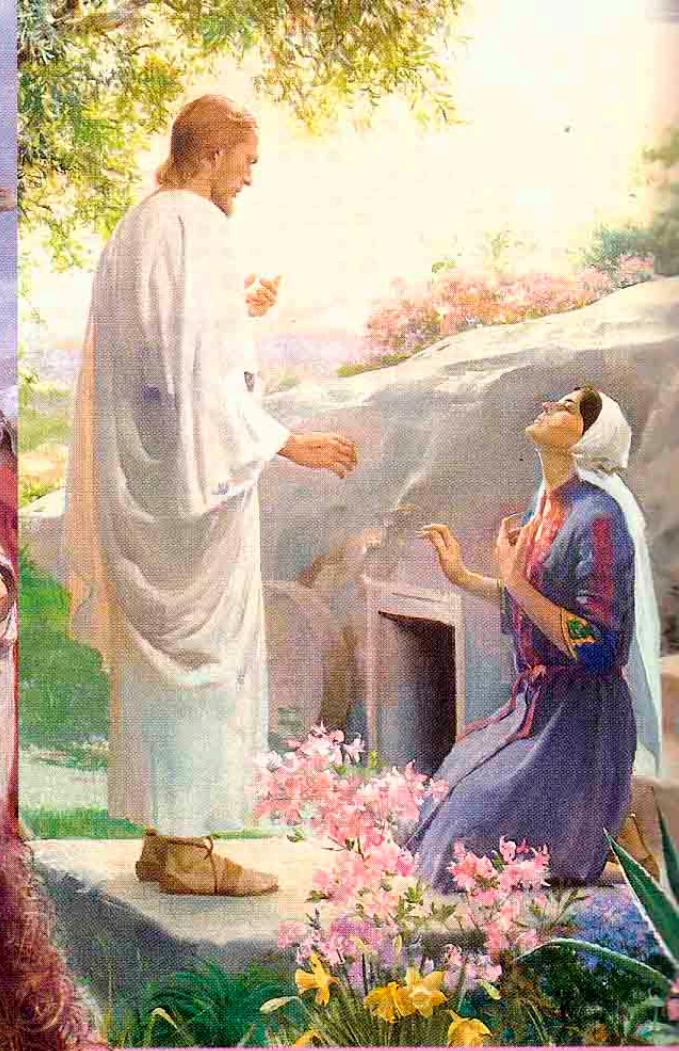
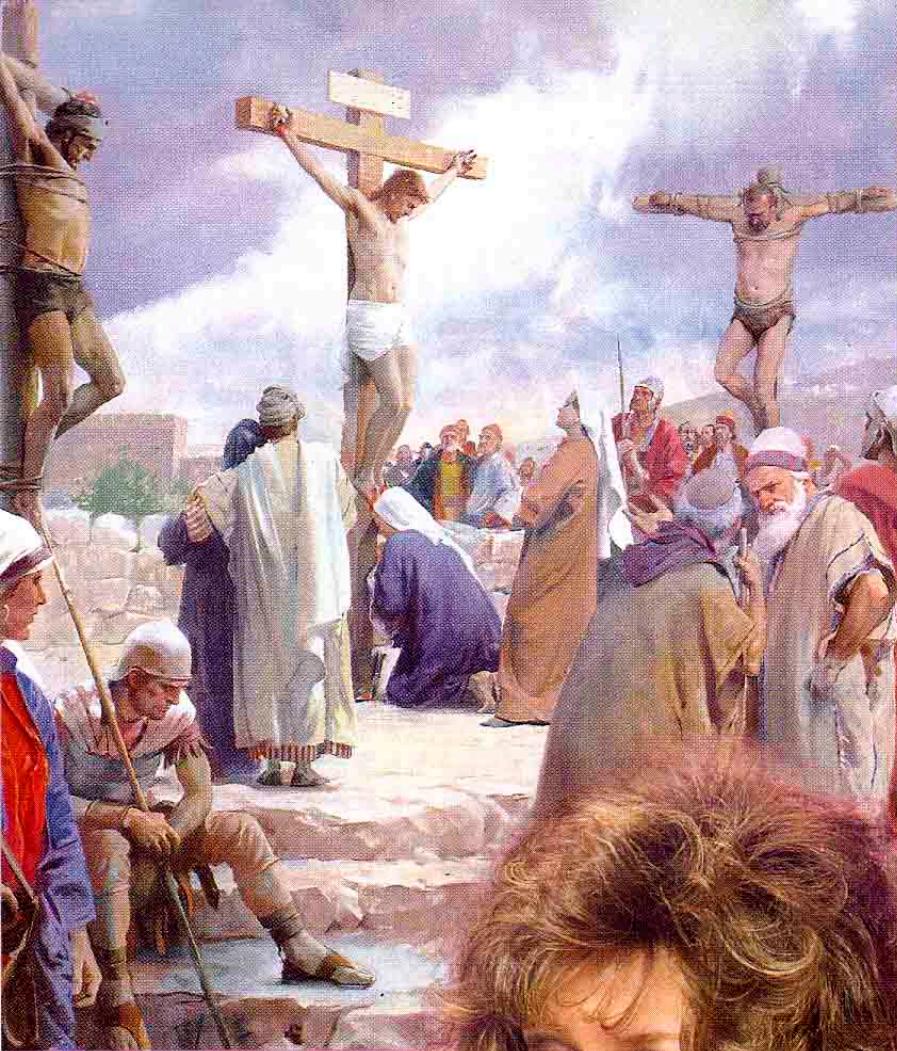
に関する真理を自分自身で見つけだそうと決心しました。
聖典を交互に参照することから始めましたが、驚いたこと
に、聖書とモルモン経には何ら矛盾するところがないのです。
私にとって聖書は貴重な神のみ言葉であり、何の疑いもなく信じ
ていました。モルモン経の教義は、聖書によって証明する
ことができるのでしょうか。私はその答えを見つける
ことにしました。

夫の教会の本をいろいろ見ているうちに、リグランド・
リチャーズ長老の「奇しきみわざ」という本に出会い、読
んでいくうちに、私のために書かれたかのように感じま
した。私は死者のバプテスマと、キリストの復活までの期間
の使命についての新約聖書の聖句と、空になった墓の前で
イエスがマグダラのマリアに言わされた言葉を見つけました。
「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみも
とに上っていないのだから。」(ヨハネ20:17) イエスは死
後すぐに御父のところへ戻ったのではなかったのでしょうか。
でも私は、十字架上の罪人に対するイエスの言葉「あ
なたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」
(ルカ23:43) をイエス自身の臨終の悔い改めを示す言葉
だと理解し、また人にもそう教えていたのです。私は前に
これらの聖句を数えきれないほど読んだことがありましたが、
本当に理解していたわけではありませんでした。今にな
って私は、末日聖徒イエス・キリスト教会について、自
分が誤解していたことに気がついたのです。

私は勉強し、祈るうちに、ひそかにさけていた質問への
答えを見つけ始めました。こうしてついに私は、この
教会が救い主の教会であり、その教義は救い主の教義である
ことを知ったのです。

1984年、私はバプテスマを受けました。私の心が開かれ、
みたまにより真理に導かれるときまで主が忍耐強く待つ
てくださいましたことに感謝しています。□

* ポーラ・マイナー、アルカディア・カリフォルニアステ
ーク部、モンロビア・イーストワード部会員



「あなたはきょう、
わたしと一緒にパ
ラダイスにいるで
あろう。」(ヨ
ハネ20:17)

「わたしにさわつ
てはいけない。
わたしは、まだ
父のみもとに
上っていな
いのだから。」
(ルカ23:43)



島袋前神殿長から 日本の聖徒の皆さんへ

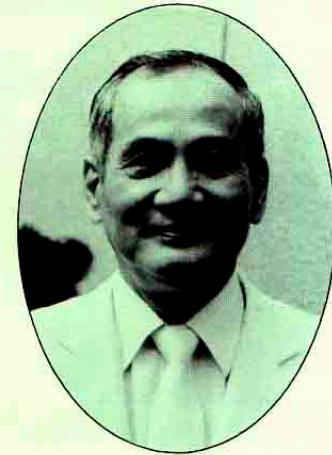
日々の聖徒の皆さんとの愛と友情に、先祖の記録の探求、神殿のみ業に対する不断の奉仕に、心からの感謝をお伝えしたいと思います。皆さんの奉仕と、ご協力がなければ、私たちはこのように、心からの満足と達成感を得ることはできなかつたでしょう。皆さんのすばらしい模範によつて、私たちの証もまた強められました。

神殿宣教師の方々、神殿職員の方々、オ

ーディナスワーカー、レセプショニスト、タイピスト、オルガニスト、それぞれの責任を、無私の心で果たしてくださったすべての方々に、感謝を述べたいと思います。

新たに東京神殿神殿長となられる堀内兄弟、堀内姉妹のもとでも、皆さんの心からの支持と奉仕が続けられますよう願ってやみません。

私たちは9月3日にハワイに発ちます。



皆さんのお上に主の祝福があり、健康で、幸福で、充実した生活を営まれますよう、心からお祈り申しあげます。

サム・K・島袋兄弟

「神殿長さんがそばにいらっしゃるだけで、落ち着いたやさしい気持ちになれるんです」と、周囲の人たちは言います。1985年1月から本年8月まで、東京神殿神殿長の責任を果たしてこられたサム・K・島袋兄弟は、9月3日にハワイに発たれました。

島袋兄弟は、ご両親が沖縄からハワイに移住され、1925年にホノルルで生まれました。

島袋兄弟が末日聖徒となったのは、高校の夏休みにアルバイトをしていたガソリンスタンドで教会員と知り合ったのがきっかけで、MIAや日曜学校に出席して、半年後にバプテスマを受けました。この半年の間に太平洋戦争が勃発しましたが、土地柄のせいか、日本人として迫害を受けるようなことはありませんでした。

戦争が始まり、彼は通訳兵として軍隊に入り、アメリカ本土バージニア州で軍務に

就きました。このとき、そこにいた兵士のほとんど(400人ほど)が前線に送り出され、わずか30人がバージニアに残されました。その中に島袋兄弟はいました。何か特別な理由があったわけではなく、偶然が重なり、その30人の中に入ることになったのです。

そして再び、その30人の中の15人が戦地に送られたとき、彼はまた、基地に残る15人のうちのひとりとなつたのでした。

「まだ若い、血気盛んなときでしたから、皆と一緒に前線に行きたいと真剣に望みました。本当に行きたかった」と島袋兄弟は語ります。しかし、その前線に送られた兵士のほとんどは、生きて戻ることはなかったのです。

まもなく終戦を迎え、ハワイに戻り2年間仕事をした後、政府の除隊援助金でハワイ大学に4年間通い、卒業後、マーシャル群島で軍の仕事に携わりました。そして仕

事を始めてから1年半ほどたつたころ、「私はテントの中で雑誌を読んでいました。そのとき突然、何かものすごい力が全身を駆け抜けっていました。温かい、ものすごい力を感じました。今、伝道に出なければいけない。そのようにささやく何かを感じました。その力を全身で感じて、読んでいた雑誌の内容もわからなくなるほどでした。」

この経験をして、すぐに伝道の申請を出し、その年の7月にソルトレーキで、十二使徒のリグランド・リチャーズ長老から宣教師としての按手任命を受け、沖縄に行くように指示を受けました。

この任命は、島袋兄弟を驚かせると同時に、深い理解に導いたのでした。というのは、祝福文の中に、彼は将来、「両親の生まれた地で伝道する」とあり、その祝福文が真実であることを悟ったからです。両親の生まれた地とは沖縄のことですが、当時、沖縄には伝道の門戸は開かれておらず、島袋兄弟はまさしく、沖縄の地を踏んだ最初の宣教師となつたのでした。

伝道から帰った後に結婚し、1981年に仙台伝道部伝道部長に召されるまでの23年間、州の労働局に勤務し、州議会に提出する法案、法律条文などの作成に携わりまし



●島袋前神殿長ご夫妻

た。

「とても楽しい仕事でした。周りの人もいい人ばかりでしたから、伝道部長に召されたときには少し寂しく感じました」と語る島袋兄弟に対し、「主人は、人とトラブルを起こすことがまったくない人ですから。どこにいても居心地がいいんだと思います。別の所で働いていたとしても、やはり同じようなことを言うと思いますよ」と、島袋姉妹。

1985年、伝道部長の任期を終え、新たに東京神殿神殿長に召された島袋兄弟は、次の6つの目標を掲げて、その務めに臨みました。

1. 日本中の資格あるふさわしい教会員すべてに神殿の祝福と約束をもたらす。
2. すべての会員が、先祖の記録を探求し、神殿に忠実に、また定期的に入ることによって、先祖を救おうという望みと決意を持つよう助ける。
3. 神殿内に、調和ある敬虔な雰囲気をかもしだし、働く人や参入者が、神殿の奉仕に喜びを見いだすとともに、再訪問が楽しみになるようにする。
4. オーディナスワーカーや神殿宣教師が、神殿の儀式を正しくかつ敬虔に行なえるよう指導訓練するととも

に、参入者も同様に行なえるよう助ける。

5. そのほかの働き手も、自分の責任をよく果たせるよう指導訓練することにより、神殿の各儀式の美しさと神聖さを増すようする。
6. 究極的に、日本人のオーディナスワーカーが、オフィシエーター、シーラー、洗い清めと灌油の執行者、ペール・ワーカーなどに割り当てを与え監督するよう権能を委任し、各儀式が能率よく、敬虔に行なわれるようする。

参入者の急激な増加や、様々な変化のあったこの4年間、まさに日本の神殿活動の過渡期にあって、島袋神殿長ご夫妻はその大きな責務を果たされました。

「兄弟は、あまりつらさや苦しさを表に出しません。というより、そういうことをあまり感じないかもしれません。ただ私たちの苦心といえば、参入される方々、奉仕される方々に肉体的にも精神的にも、嫌な思いをさせないように、どんなときにも笑顔を忘れないように、といったことでしようか」と島袋姉妹が言われるように、どんなことでも楽々とこなされる島袋兄弟ですが、その心労は並大抵のものではなかったことでしょう。

島袋ご夫妻のもたらしてくださった祝福を無にすることのないよう、私たちもさらに努力精進し、神殿の業を推し進めていきましょう。(編集室)

新役員の任命

7月21日から8月20日までに管理本部会員記録統計課に通知のあった役員の異動(敬称略)

☆大阪北ステーキ部大津支部は7月22日付でワード部になりました。

●札幌西ステーキ部藻岩ワード部

新監督：坂本一彦(前任者：布川哲哉)

●釧路地方部北見支部

新支部長：高瀬健二(前任者：加藤敏行)

●東京西ステーキ部府中ワード部

新監督：長田弦(前任者：手塚昭夫)

●大阪北ステーキ部高槻ワード部

新監督：中川一茂(前任者：大石幸治)

●大阪伝道部御坊支部

新支部長：山崎政彦(前任者：加賀谷拓也)

●神戸ステーキ部西宮ワード部

新監督：山口正伸(前任者：湯浅勲)

●高松ステーキ部徳島ワード部

新監督：福田光剛(前任者：石部建雄)

●熊本地方部大牟田支部

新支部長：小林周二(前任者：宮瀬英都)

●那覇沖縄ステーキ部普天間ワード部

新監督：玉寄和弘(前任者：伊佐善明)

●那覇沖縄ステーキ部沖縄ワード部

新監督：目黒光一(前任者：伊波貴)

●鹿児島地方部宮崎支部

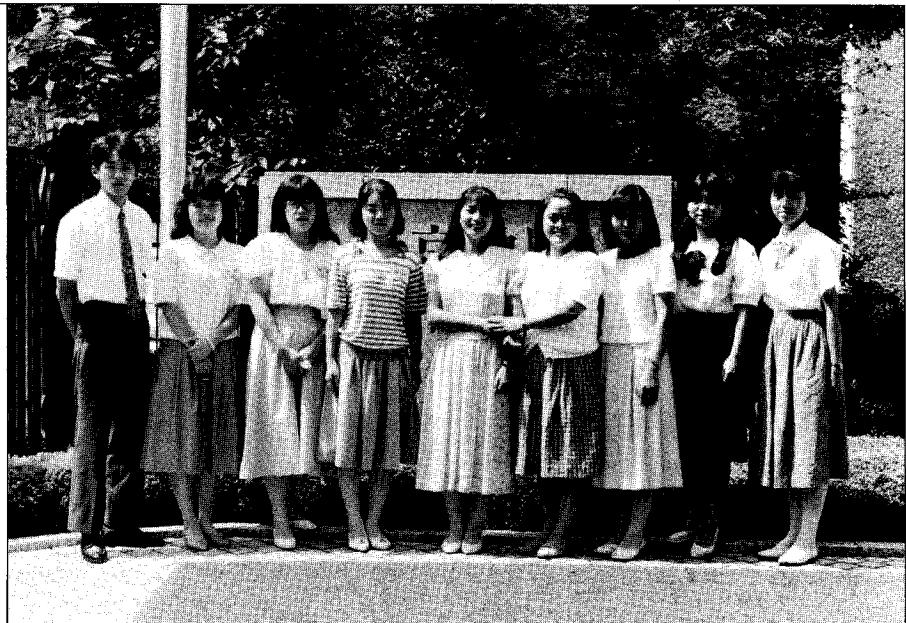
新支部長：北川國治(前任者：徳留清弘)



8月に 召された JMTC 第111期生 9人の名簿

S:ステーク部, M:伝道部, D:地方部,
W:ワード部, B:支部

左から1~9



〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉	〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 安田 義人	札幌S／旭川西W	岡山伝道部	6. 森田いく子	大阪堺S／三国ヶ丘W	神戸伝道部
2. 山崎ちひろ	東京南S／渋谷W	福岡伝道部	7. 緒方 康子	岡山M／宇部B	東京南伝道部
3. 西澤文恵	福岡M／八代B	大阪伝道部	8. 渡辺万里子	東京北S／越谷W	名古屋伝道部
4. 西城 希美	大坂堺S／河内長野B	名古屋伝道部	9. 早川則子	札幌西S／室蘭W	東京北伝道部
5. 小野理恵	福岡S／藤崎W	仙台伝道部			

兄弟で共に伝道に

黒木 豊城

小 学校の2年生か3年生のころ、近くにプロテstant系の教会がありました。私と妹はちょっとしたきっかけから、そこに通うようになりました。その当時私は、「神様って、どこにいるんだろう。神様の大きさってどれくらいだろうなあ」とひとりで考えたりしていました。

そのうちに聖書を買って読みはじめました。私には聖書の言葉は美しく、力強いものでした。むずかしいものではなくて、本当に素直に心の中に入ってきたのを覚えています。その中で心に留まった聖句がひとつありました。「全世界に出て行って、すべての造られた者に福音を宣べ伝えよ。」私は、春の陽差しの中、あぜ道の上でひとり神様に祈りました。「神様、どうぞぼくを全世界に出て行って、すべての造られた者に福音を宣べ伝える者にしてください。」今す

ぐにでも伝道に出れるのかと思っていました。聖書の中で勇敢に神様の道を宣べ伝えたペテロやパウロのような人物に強いあこがれを持ち、自分も彼らのようになりたいと思っていました。

それから数年後、私が12歳のとき、私の家に宣教師が訪ねました。

風の強い寒い日、家族でこたつに入ってテレビを見ていました。なにげなく窓から外を見ると、ふたりの外人が隣の家の戸をノックしている姿が目に映りました。妹と私が「あっ、外人だ、外人だ」と騒いでいると、父が「ああ、あれはね『宣教師』と言って神様の使いなんだよ。もし、うちにもたら温かく迎えてあげなきゃいけないよ」と言いました。それから、彼らは我家のドアをノックし、私たちは彼らを迎え入れました。それがきっかけでした。



●黒木俊宏兄弟（左）と黒木豊城兄弟

数ヶ月間、宣教師の話を聞いたり教会に行ったりして、家族5人でバプテスマの門をくぐりました。いろいろな問題がありましたが、宣教師は私たち家族を心から愛し助けてくださいました。宣教師は私たち家族にとって大の友達でした。私たちを導いてくださった彼らは本当に神様の使いでした。

そして私たち兄弟3人は神様の福音の中で育ちました。また、青少年の時代にはすばらしい教師のもと、セミナーを学び、インスティテュートによって真理を探求し

ました。

「わが子よ、忘れずに青年の時知恵を得よ。青年の時から神の命令を守ることを習慣とせよ」とは確かに主のみ言葉だと思います。友人や社会での交わりの中においても、いつも何が正しくて、何をしてはいけないか、また何をしなければならないのかが、はっきりわかるようになっていました。

19歳になってメルケゼデク神権をいただいたときに私が幼いころから抱いていた望みは大きくなり、その1年後に兄と共に伝道に出ることになりました。

伝道に出る前に「本当に伝道に出たいのか。伝道に出て何を伝えたいのか。」そのことを知りたくて、ずっと祈っていました。このとき初めて私は主と心が交わったこと

を悟りました。心の中に「主が世の人々にどれほど『愛』を示したもうたかを心の中に深く考えてほしい……」と感じたのです。しかし、そのとき私は、「でも神様、私は自分が愛されていることを本当に知っていますが、ほかの人が愛されていることを知つてはいません」と心の中で言いました。「どのようにすればいいのですか。」

すると天父はこのように答えてくださいました。「あなたが得た喜びを、ほかの人々にも……。」

泣けて泣けて仕方ありませんでした。「私も伝道に出られる」とわかったからです。主がそうすることを望んでおられることを知ることができたからです。私は私が得た喜びを分かち合うことができるのです。

そして今、今度は私たちが、私たち家族を愛してくれた、あの宣教師と同じ神様の使いとして、同胞に主の愛を伝えるために働いています。

主の器となりきれずに自分の無力さを感じてしまうこともあります。しかし、弱いときにこそ、主の力を借り、主の人を導く不思議な業を見、驚き、喜び、強くなるのです。主は確かに世の人々を愛されています。そして私は神のみ手に使わされて、人に主の愛を伝えることができることを誇りに思い、この業に喜びを感じています。

この業が確かに主のみ業であることを心を込めて証します。(くろぎ・とよき 1967年生まれ、東京東ステーキ部牛久ワード部出身)

たんざくの願い

黒木 俊宏

小 学生のころ私の弟と妹が近くの福音教会の日曜学校に熱心に通っていた時期がありました。私の家は仏教でしたし、私自身もキリスト教について興味はなかったので別に気にしませんでしたが、ある七夕の日の出来事は今でも良く覚えています。母が七夕の笹の葉に結わえる「たんざく」に願いごとを書くよう私たちに言って渡すと弟はすぐにこう書きました。「大きくなったら宣教師になって全世界で伝道したい」と。そのときの私にはそれがどうしても理解できませんでしたし、ある意味では馬鹿げた願いに思えました。まさか、自分がク

リスチャンになって、こうして伝道するなどと夢にも思っていませんでしたから。

それから何年かたち、私が中学2年生の冬を迎えたとき、ふたりの若いアメリカ人宣教師が私たちの家を訪問しました。父は彼らを家の中へ招き入れ、その日から私の家族は永遠の家族となるための道を歩みはじめました。そして家族でバプテスマを受けるため、一人一人が証を持てるようになるまで根気よく励まし合い助け合って翌年の4月に家族5人で一緒にバプテスマを受けることができました。

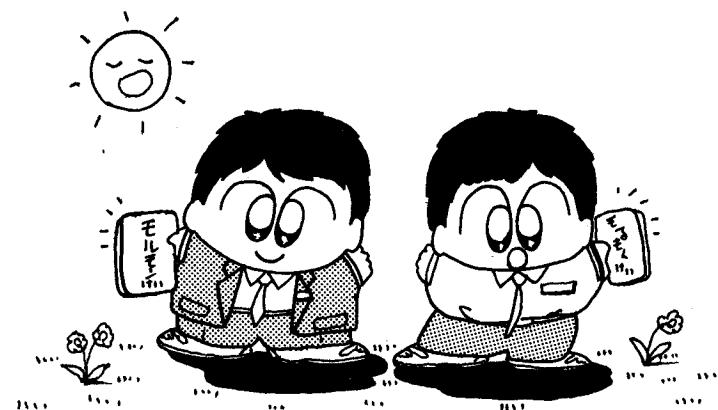
やがて私は社会に出て伝道資金を貯める

ために上京して働き始め、2年後、弟も同じ会社に就職しました。そのころからふたりの伝道に出る決意がさらに強くなり、自分たちの家族の様に世の人々にこの喜びを知ってもらいたい、主の愛を伝えたいと強く思うようになりました。弟と互いに励まし合って伝道に出られる日を待ちました。JMT Cに入ったのは去年の8月、長老はふたりだけだったため私の最初の同僚は弟になりました。また幸いなことに両親と妹が鹿児島地方部の神殿参入で宮崎から来ていたため、一緒に神殿に入ることもできました。

伝道に出てからすでに1年が過ぎ、その間に多くの経験をしました。伝道の偉大きさ、すばらしさに感動して胸が熱くなったこともあります。時には悲しいことやつらいことが生活を塞いでしまうこともあります。しかし、その経験から新たな証を得、主が私たちを見捨てず支えてくださることを知りました。そして未熟な私に力を添えてくださいました。「恐れてはならない。わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手をもって、あなたを支える。」(イザヤ41:10)と書いてある通りです。

宣教師として働くことを本当に感謝しています。

私は伝道に出て、宣教師が必死になって働いている姿を見ました。同僚がみたまの導きを求めて祈るのを見ました。教員が伝道の喜びを知って涙を流すを見ました。人が主の福音によって変わってゆくのを見



●このページは、ホームティーチング／家庭訪問の際に、切り離してお使いください。

1988年11月大管長会メッセージ 「わたしに従ってきなさい」

第二副管長トマス・S・モンソン

グレートソルトレーク峡谷への入口となる所に、「まさにこの地である」という文字を刻んだ、ブリガム・ヤング大管長の像が、あたかも番人が道を指示するかのようにそびえ、その像の背後には、聖徒たちが様々な困難と戦いながら旅をしてきた大平原の長い道が続き、差し伸べられた腕の前方には、尊い約束の地が広がっています。

1847年にブリガム・ヤングによって組織され、率いられた隊の旅は、歴史家たちから合衆国史上最も英雄的な行為のひとつとして評されています。しかしモルモンの開拓者の中には、病気、厳しい風雨、飢えに苦しみ、命を落とした人々が無数にいます。家畜も大きな幌馬車もなく、文字どおり手車を引きながら、大平原や山を越え、2,000キロメートルに及ぶ旅をした人々もいました。彼らの内、6人にひとりは旅半ばにして倒れています。

そして彼らの中にはノーヴー、カートランド、ファーウェスト、ニューヨーク州などよりもはるかに遠くの地、イギリス、スコットランド、スカンジナビア、ドイツなどから旅をして来た人々が数多くいました。小さな子供たちには、家族や友人、楽しく安全な生活を捨ててまで、旅に出るよう両親を駆り立てる偉大な信仰を完全に理解することはできなかったでしょう。「お母さん、どうしてここを出るの。これからどこへ行くの」と聞いた子供もいたことでしょう。それに対して親たちはこう答えたので

はないでしょうか。

「一緒に行きましょう。神の市シオンへ。」

神を信頼して

安らかな生活があった故郷と約束の地シオンの間には、大西洋の荒波が待ち構えていました。この危険な旅の間に彼らが味わった恐怖は、はたしてどれほどのものだったでしょうか。彼らはみたまの静かなささやきに促され、素朴ながらも堅固な信仰を支えとし、神を信頼して船出をしました。それは過去の生活を捨てて、新たな生活に向けて出発する旅でもありました。

私の曾祖父母も小さな子供たちを引き連れ、わずかな持ち物を携えて、人がひしめき合う木造船に乗り込みました。大西洋の波は高く、すし詰めの船室に閉じ込められた状態で、長い航海が続きました。メアリーという病弱な女の子がいました。彼女の母親は長い旅の疲れでどんどん弱っていく娘をいたたまれない思いで見守っていました。メアリーはやがて重い病気にかかってしまいましたが、来る日も来る日もただ揺れ続けるだけの船の中には、病院もなければ医師もいませんでした。両親は毎日毎日、海のかなたに目をやりましたが、陸の影は一向に見えてきません。結局、小さなメアリーは長くつらい船旅に耐えることができませんでした。長い間熱病に苦しんだあとに、安らかにこの世を去っていました。

家族や友人が大勢甲板に参列し、船長の司式によって葬儀が行なわれました。帆布

に丁寧に包まれたメアリーの小さな遺骸が荒れ狂う海の中に沈んでいきました。メアリーの父親は自分自身も悲しみに声を詰まらせながら、妻を慰め、何度も「主が与え、主が取られたのだ」(ヨブ1:21)と繰り返しました。しかし、私たちはいつの日かメアリーに再び会うことができるのです。

シオンの栄光

イリノイ州からソルトレーク・シティーまでの間には、石を積み上げて作られた墓が至る所に見受けられます。それは開拓者たちが払った犠牲の象徴です。彼らの肉体は安らかに地の中に葬られていますが、その名はいつまでも私たちの心の中から消えることはありません。

疲れきった牛たちの歩みは遅く、車輪はきしみ、勇敢な男たちでさえも苦しみあえぐ旅でした。しかし、信仰に鼓舞され、強靭な精神力を持つ私たちの先祖は歩み続けました。彼らは、昼は雲、夜は火の柱によって導かれていきました。

そして開拓者たちはよくこの歌を歌ったのです。

恐れず来れ聖徒 進み行けよ
その旅はつらくとも 恵みあらん
無益な憂いは 払いて努めよ
されば喜ばん すべては善し
(『恐れず来れ聖徒』讃美歌23番)

この開拓者たちは、主の次の言葉をし

っかりと心に留めていました。「わが民は、すべてのことに試練を受けざるべからず。かくして彼らはわが与えんとして持てる光栄、すなわちシオンの光栄を受くるために準備せらる。」(教義と聖約136：31)

長く苦しい旅の終わりが近づいてくると、一人一人の心の中に喜びが満ち、疲れきった体にも新たな力がわいてくるようになりました。

ある開拓者が残した古びた日記の中にはこう書かれています。「私たちは頭を垂れ、心からの感謝の念を持って、全能の神に謙遜に祈り、この地を神の民が住む地としてみ前に捧げた。」

別の開拓者は次のような言葉を残しています。「私たちが山の中腹を掘って作った一部屋だけの家には、窓のようなものは何ひとつなく、ドアもなかった。それで母が出入口の所に古びた毛布を一枚つるした。それが最初の冬の間、わが家のドアとなつた。母は、たとえ豪華な宮殿を持つ女王でも、この横穴式の家ができるときに自分が感じた誇らしい気持ちや、主のみ守りと祝福への喜びにまさる思いを感じることはできないだろうと話していた。」

開拓者たちは様々な試し、苦しみ、悲しみを確固たる勇気と不動の信仰によって乗り越えてきました。開拓者たちを予言者として導いたブリガム・ヤングは、彼らが交わしていた誓約について次のように言っています。「而して、われらの誓約はかくの如し。すなわちわれら、ことごとく主の法

令を履み行うべし、と。」(教義と聖約136：4)

現代に生きる私たちの試練

時の流れとともに、人々は開拓者を忘れ、粗末な墓に愛する者を葬って涙と苦しみの道を歩み続けた彼らへの感謝の気持ちを失ってしまっています。現代の私たちにはどのような試練があるでしょうか。歩みを困難にするごつごつとした道や山はないのでしょうか。切り開かなければならぬ道はないのでしょうか。苦労して渡らなければならない川はないのでしょうか。現代社会を脅かす様々な危険から、私たちを安全な道へ導く開拓者精神は本当に必要とされているのでしょうか。

道徳の標準は低下の一途をたどっています。犯罪を犯して刑務所や感化院に送られたり、法の制裁を受ける人々の数も増えています。重罪から軽い罪まで、その種類を問わず、犯罪が増加しています。礼儀を重んじる気風も急速に衰えているように思われます。永遠の喜びを犠牲にして、束の間の喜びを追い求める人々も多くいます。宇宙を征服しても自分自身を治めることができないでいるのです。このようにして人々は心の平安を失っているのです。

私たちは、昔の開拓者たちのような勇気と強い意志を身につけることができないのでしょうか。現代の開拓者になることはできないのでしょうか。ある辞書には、開拓者の定義として、次のようなことが書かれ

ていました。「先に進み、他の人々に進むべき道を示す人」今こそ開拓者が必要とされている時代です。

一時は隆盛を誇ったギリシャ人やローマ人も、他の人々の権利を尊重せずに、いわゆる「自由」を追い求めるようになると、衰退の道をたどり始めました。彼らは努力をせずに安樂な生活を望み、自分の責任を果たさずに安全を手にしようとしたのです。しかし最後には、自由も、安樂な生活も、安全もすべて失ってしまいました。人々が利己的な目標の追求に汲々としている現代にも同じようなパターンが見受けられます。一方、「だれの話に耳を傾けたらよいのか」「だれに従ったらよいのか」「だれに仕えたらいよいのか」と、生活の指針を求めて、あちらこちらとさまよっている人々もあります。そしてサタンは私たちに偽りの指導者を与え、狡猾な方法で義と善の道から引き離そうと、常に待ち構えているのです。

真理に固くつく

しかし、真剣に耳を傾ける人なら、「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14：6)と言われた救い主のみ言葉を心に留めることでしょう。誘惑に負けず、真理に固くつくには、主のみ言葉に耳を傾けなければなりません。忘れないでください、一時的な興奮や罪悪の中に喜びを追い求めようとしても、決して心の飢えを満たすことはできないのです。罪悪から徳が生まれることはなく、愛が憎しみによって強

められることもありません。また、臆病な気持ちの中から勇気が生まれることもありませんし、疑いの中から信仰が生まれることもありません。そして争いは、主とはまったく無縁のものなのです。

純潔、正直、神のみ言葉への従順などの徳について、愚かな人々からあざけりや侮辱を受け、それに耐えるのが非常にむずかしいと感じている人々もいます。しかし、その一方では、信仰をしっかりと守り、時の流れの中でもいつまでも色あせない模範を示してくれた義人たちの生涯の中に、力を見いだしている人々もいます。ノアが箱船を造るように命じられたときに、愚かな人々は雲ひとつない天を仰いで、ノアをあざけり、はずかしめました。そして彼らはそのようなことを、雨が降り始めるまで続けたのです。

何世紀も前のアメリカ大陸にも、救い主の実在とその使命を信じようとしない人々がいました。彼らは、救い主が十字架につけられたときの天変地異によってゼラヘムラが炎に焼き尽くされ、地が震い、モロナイハ市が地の中にのみ込まれ、モロナイ市が水中に没するまで、言い逆らい、不従順な生活を続けました。それまで義人をあざけり、はずかしめ、神を冒瀆し、罪深い生活を続けていた人々は、重苦しい闇と恐ろしい沈黙の中で滅ぼされていきました。そして、神のみ言葉が成就されたのです。

私たち人間は、何度もこのような大きな代償を払わなければ、教訓を得ることがで

きないほど愚かなのでしょうか。時は流れ過ぎていきます。しかし、真理は不变です。もし過去の歴史から教訓を得なければ、私たちは必ずや同じ過ちを犯し、昔の人々と同じ苦しみ、悲しみを味わうことになるでしょう。私たち人間には、最初から終わりまでのすべてを見通し、救いの計画を定めてくださった主に従う知恵がないのでしょうか。

人々は、文字どおり進むべき道を示してくださった平和の君に従うことができないのでしょうか。主の計画は私たちを、罪悪と自己満足と過ちのバビロンから救ってくれるので。主の模範は私たちに道を示しています。主は誘惑に遭われたときも、この世の栄華を与えようと言われたときも、それらを一蹴なさいました。

われに「来よ」という 救い主にゆかん
一人では居られず み子よ、共にあれ
永遠に主の言葉 従いてゆけば
みくにの栄えも すべて恵みうけん
(『われに「来よ」と』讃美歌77番)

新年を間近に控えたこの時期にあたり、救い主イエス・キリストに愛の精神を持って従順に仕え、人々のために義の道を切り開く決心をしようではありませんか。□

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以

下の点について話し合うとよいでしょう。

1. 開拓者たちは様々な試し、苦しみ、悲しみを確固たる勇気と不動の信仰によって乗り越えていった。
2. モンソン副管長の問いかけ — 「現代社会を脅かす様々な危険から、私たちを安全な道へ導く開拓者精神は本当に必要とされていないのでしょうか。」
3. 永遠の喜びを犠牲にして、束の間の喜びを追い求めている人々が数多くいる。
4. もし過去の歴史から教訓を得なければ、私たちは必ずや同じ過ちを犯し、昔の人々と同じ苦しみ、悲しみを味わうようになる。

話し合いを進めるために

1. 人々をキリストのみもとに導くには、模範によって正しい生き方を示さなければならない。どうしたらその模範を示すことができるだろうか。
2. このメッセージの中に、家族で読んだり話し合ったりするのによい聖句や話はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておいた方がよいだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。

1988年11月家庭訪問メッセージ

「愛は、すべてを耐える」

(Iコリント13:7)

目的：人生の様々な苦しみの中にはあっても、思いやり、
謙遜さ、勇気、信仰などをさらに強めていく。

Aンダーセン姉妹が心から主に頼るようになつたのは、幼い娘が、それまで友人として交際していた男性から性的な虐待を受けるという忌まわしい出来事があった後のことでした。長々と続いたその裁判では娘自身が証言させられ、家族もかなりの苦痛を強いられました。

事件は裁判によって公にされ、アンダーセン姉妹の家族は不快な思いを鬱積させていました。彼女はそのときの自分の気持ちについて次のように述べています。「家の中のいつもの仕事や教会の責任を果たすのがとてもつらくなり、考えが混乱したり、気持ちが落ち込むようなことが何度もありました。」

しかし、主は彼女の家族がこの困難な時期を乗り越えられるように、友達というすばらしい祝福を与えられました。そして主はもうひとつ的方法で彼女に祝福を与えられたのです。生まれて間もない彼女の子供が夜中に目を覚ますようになったのです。それはほかの子供たちのときにはまったく経験しなかつたことでした。その理由はあとになってわかりました。彼女はこう言っています。「みたまのささやきによって知ったのですが、主は私が毎晩毎晩目を覚ましたまま、悩み苦しんでいることのないよう

に、子供の目を覚ましてくださったのです。子供が起きているので夜中でもすることがあり、悲しんでばかりいるわけにもいきませんでした。」

彼女とまったく同じでないにせよ、私たちはこの世に生きている限り、苦しみや悲しみを経験します。ベンソン大管長は次のように話しています。「主が予告されているように、私たちは現在人々が肉にあっても、また靈にあっても恐れおののいている時代に生きています。またサタンは聖徒たちを失望と落胆の淵に沈め、暗い陰うつな気持ちにさせて滅ぼそうと、前にも増して躍起になっているのです。」(『落胆してはならない』『聖徒の道』1987年3月号、p.2)

試練に負けてはいけません。私たちは試練を通して謙遜さ、信仰、勇気、思いやりなどについて学び、さらにキリストに似た者とさえなることができるのです。試練を通して、私たちは慈愛すなわちキリストの純粋な愛を、さらに強めていくことができます。そして、このキリストの純粋な愛は、「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」のです。(Iコリント13:7、モロナイ7:45参照)

試練のときに人々に純粋な愛を示し、主を信頼するには決して簡単なことではありません。

ません。そのようなときにはベンソン大管長の次の言葉を思い出してください。「主のようになろうという目標を心に抱いてください。そうすれば、主を知り、主のみこころを行ないたいと心から求めることによって、沈んだ気持ちを払い去ることができます。」(『落胆してはならない』p.7)

苦しみ、失意、悲しみ、迫害にあっても、それに耐え、主を信頼するには、強い信仰が必要です。アルマの次の言葉は、忍耐について、私たちに多くのことを教えてくれています。「お前が神にたよればたよるだけ、それだけ多くお前は自分の身に受ける試練と苦しみと悩みから救われ、終りの日になって高くあげられる。」(アルマ38:5)

□

訪問教師への提案

1. 人は悲しみを通してさらに謙遜になり、キリストに似た者となることができる。そのことについて話し合う。
2. 試練を通して成長した経験があれば、それについて話し合う。

(「家庭のタペアイデア集」pp.138、143、173-74参照)

ました。そして主が祈りを聞きたもうて奇跡を起こしてくださるのを目にして、確かに伝道が主のみ業であることを知りました。確かにこの福音を求めている人がいます。今も待ちつづけているはずです。

数年前に小さな「たんざく」に書かれた

願いはいつしか家族みんなの願いに変りました。

同じときに私たちふたりを宣教師として送り出してくれた家族と、周囲の兄弟姉妹、そしてそれを温かく見守り支えてくださる主に感謝します。そしてこれからも弟や同

僚たちと共に「この福音は真実です。神様は生きておられます。」と力強く宣べ伝えていきます。(くろぎ・としひろ 1965年生まれ、横浜ステーキ部川崎ワード部出身)

新刊の紹介

宣教師用教授資料

レッスン1	天父の計画	PBMI8712JA	100円
レッスン2	イエス・キリストの福音	PBMI8723JA	100円
レッスン3	回復	PBMI8734JA	100円
レッスン4	永遠の進歩	PBMI8745JA	100円
レッスン5	キリストのような生活	PBMI8756JA	100円
レッスン6	王国の会員	PBMI8767JA	100円
	レッスンに関する指示	PBMI8778JA	100円
	宣教師用視覚教材	PVMI2880JA	400円
学習ガイド1	天父の計画	PTMI8241JA	10円
学習ガイド2	イエス・キリストの福音	PTMI8252JA	10円
学習ガイド3	回復	PTMI8263JA	10円
学習ガイド4	永遠の進歩	PTMI8274JA	10円
学習ガイド5	キリストのような生活	PTMI8285JA	10円
学習ガイド6	王国の会員	PTMI8296JA	10円



宣教師用教授資料パッケージ

PBMI8701JA

6課からなるレッスン、レッスンに関する指示、宣教師用視覚教材、求道者に手渡す6課の学習ガイドのセット。

1160円

編集室から

《原稿を募集しています》

▶各地のたよりの原稿を常時募集しています。改宗談や日々の生活で得た証(仕事にかかわる証など)、本誌を読まれての感想文などをお送りください。

▶各地の行事や催しに関する記事はできるだけ早めにお送りください。

▶来年2月号掲載分の締切は11月30日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)と教会での責任(役職名)、生年月日をご記入ください。お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。

▶あて先: 〒106東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(444) 5264

ワード部/支部特集⑦

「ひかり」が見えてきますよ

広島ステーキ部

光ワード部



●全国各地のワード部／支部をご紹介するコーナーです。

わが光ワード部

監督 山田 洋次



広 島駅から、北へまっすぐ歩いて5分、訪問してくださる方から「日本で一番よい所にある教会ですね」と、よく言われます。名前は広島光ワード部。教会にぴったりの名前だと誇りに思っています。約10年前に、元の広島支部から分割されて、広島東支部として始まり、約1年後に今の光町に移りました。広島市の東部3分の1をエリアとし、約100名の会員が集っています。

ます。

3階建の建物は、元は喫茶店、レストラン、麻雀クラブでしたが、少しづつ改装して今は教会らしくなっています。しかしちだ献堂されていないので、1日も早く全面改裝して、正式に献堂された教会の建物になる日を楽しみにがんばっています。旅行者には特に便利なようで、帰還宣教師の家族や広島大学の留学生、外国人のビジネ

スマンがよく訪問してくださいます。ローカルにしては国際的な教会です。

現在も副監督のラーソン家族や、プライス家族が集っています。真に光を求める人々、福音を本当に必要としている人々、またみすがら救いを求める人々のために福音の喜びや幸福を共に分かち合えるようなワード部になるよう、「光」という名前に恥じないよう、私たち光ワード部の会員はがんばっています。もし広島に来られることがありましたらこの輝くばかりの（建物は古いですけれども）光ワード部へちょっと寄ってみませんか？きっとあなたも「ひかり」が見えてきますよ！（やまだ・えいじ 1954年生まれ）

感謝の気持ちを忘れずに

西 末子



小 さいころ、私の目によく映ったのは両親の喧嘩でした。父はお酒が好きで母によく怒鳴ったり、重い灰皿を投げつけたり、食卓のテーブルをひっくり返すこともありました。私は父に対して悪い気持ちを抱いたまま高校に進学しました。そんなある日、家に帰ると母が倒っていました。そしてその日の午後、脳血栓で亡くなつたのです。そのとき目の前が真っ暗になつたのを今でも覚えています。私はその後、父に反抗的になり、家に帰っても父と顔を合わせるのが嫌で、友だちとよく遊ぶようになり、曲った道を歩むようになりました。しかしそれから1年ほどして、家に兄夫婦が一緒に住むようになり、兄嫁は私に何度も手紙を書いて、正しい道を進むように気

づかせてくれました。1976年にこの教会に入つてからは、父に対する悪い思いも少しずつ変わり、今では私を育てくれた両親に感謝しています。

今は信仰篤き夫と、3人の子供に恵まれています。結婚して今年の5月で10年になりました。その間子供のことや主人の仕事のこといろいろなことがありました。また去年の夏に、私は顔面麻痺にかかり、半年間つらい思いをしました。しかしこの経験によって、自然に笑えること、食事をこぼさずにちゃんと食べられること、人と気持ちよく話せることなどが、本当にすばらしいことだということに気づき、感謝せずにいられませんでした。また、私がつらいとき、いつもそばで一緒に悩み励ましてく

れた家族や教会員に感謝しています。

その後、私を扶助協会の会長という大切な責任が待っていました。まだ顔面麻痺が完全になおった状態ではなかったため、私は悩みました。ときどき頭痛も起ります。2週間考えた結果、やはり神様からの召しなので引き受けることにしました。この責任をいただいて、たびたびいろんな問題が起こりますが、前のような頭痛はありません。これも本当に主の恵みだと思います。弱点や欠点の多い私でも神様に従うとき祝福が与えられます。モルモン經の聖句の中で、イテル書12章27節に「見よ、われは人を謙遜にするために人に弱点を与うれど……わが前にへりくだりわれを信ずる時にはその弱きを強きに変えん。」とあります。私たちの弱点は謙遜にするため、と書かれています。この聖句から神様からの大いなる愛を感じます。これからもへりくだる心と感謝の気持ちを忘れずがんばりたいと思います。（にし・すえこ 1956年生まれ、扶助協会第1副会長）

サンタクロースと子供たち

田中 真実



昨年のクリスマスは、私たち光ワード部にとって大変思い出深いものとなりました。毎年、子供たちがそうであるように私たち大人もクリスマスが近づくにつれて、わくわくしてくるものです。

私の心の中で、今度のクリスマスから毎年何か残してゆきたいという思いが日増しに強くなっていました。この思いをどんな風に行動に移したらよいかを思案しているうちに、近くの恵まれない子供たちの施設（修道院）のことを思いつき、子供たちのためにクリスマス会を開こうと考えました。独身成人が中心となりキャロリングの練習を始め、参加できない人たちはプレゼントにするお菓子を作り、当日教会にはケーキやクッキーがたくさん集まりました。

その日、プレゼントを配るサンタ役は、

あと1カ月足らずで帰国するふたりの宣教師でした。サンタ役のエディングトン長老と、エルフ役のクリスティンセン長老は笑顔で一生懸命がんばってくれました。伝道に励む彼らと共に修道院を訪れることができたのは、本当に私たちにとって大きな祝福でした。

約1時間半の間、賛美歌を歌ったり宣教師の楽しいスキットを見たり、サンタクロースが子供たちにプレゼントを配り、最後には修道院の職員の方々と子供たちがハンドベルの演奏をしてくださり、とても楽しいひと時を過ごすことができました。

子供たちが「また来ね！」と言って手を差し出したときのキラキラした瞳は、私たちみんなにとって何にも代えられぬ思い出となりました。私たちの訪問を快く受け



入れ、多くの準備をしてくださった修道院の職員の方々に感謝しつつ、とても満ち足りた思いで帰途につきました。

ふたりの宣教師は伝道を終えアメリカへ戻りましたが、毎年クリスマスシーズンにはあの子供たちの笑顔を思い出してくれること思います。私たちがイエス・キリストの教えを実践するときに、必ずこのようすばらしい祝福にあずかることができることを証します。

今年のクリスマス、またみんなに会えると思うととても待ち遠しい気持ちでいっぱいです。（たなか・まみ 1955年生まれ、ステーク部扶助協会第二副会長）

できなうと思うとき

今野 悅子



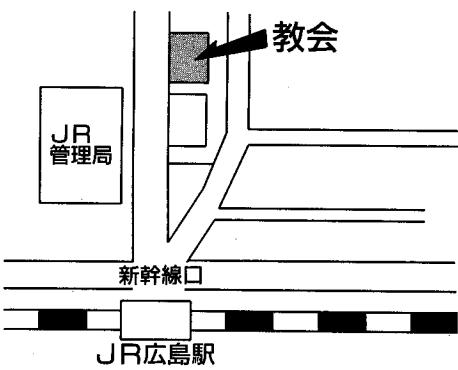
「家庭のこと、教会のこと、仕事、すべてをするなんてとてもできません！」と泣きながら心の中で叫んだことがあります。しかし叫びながら、別の思ひが聴きます。「神様から召された責任を果たせないことがあるだろうか？それに、主の助けが必ずあることを知っているのだから、家庭も仕事も、主は祝福してくださいにちがいない」と。その思いがやがて私の嘆きを抑え、涙を止めてくれました。事実、神様は私を助けてくださいます。

今春から私は、障害児施設に勤めていますが、毎日の仕事でも教会の責任でも子供たちとたくさんの時間を過ごしています。これまでの生活の中で、子供たちと触れ合うことがあまりなかっただけに、別世界にいるようです。すべてが新しい体験なのでとまどったり、自分の無知、無力にひどく落胆したりすることもあるのですが、子供

たちの素直さや汚れのない心に触れて、私の心は喜び、奮い立たされます。

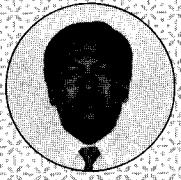
私は忙しくて、これ以上できないと感じることがときどきあります。しかし主は、私たちの日常生活の様々な所で、私たちの祈りにこたえ、助けてくださることを私は経験を通して知ることができました。主が生きておられますことを心から証いたしま

す。（こんの・えつこ 1964年生まれ、初等協会第1副会長）



握手、その心の触れ合い

西本 康治



私 が広島の地に来て、ちょうど3年がたちました。私が集っている光ワード部は、広島の中心部にあるため、人の出入りが激しい所です。毎年春先になると、幾人もの人たちが光ワード部から旅立ち、また転入してきます。その中のひとりに上稻兄弟（83歳）という方がいます。

昔、ハワイに移住されていて、近年日本に戻られた方です。長い間外国暮らしをされていたため、英語がとても流暢です。毎週ワード部に集わって、いつもニコニコ、

笑い顔の絶えない温厚なおじいちゃんです。教会では朝、「おはようございます、お元気ですか」とお互いに言葉を交わして握手をします。好きな人や久し振りに出会った人と握手をするとき、心ときめき、1日がとても楽しくなります。また、あの人と来週会えるかな？会えるといいな！などと思いながら1週間を過ごします。

私は、日曜日に上稻兄弟と握手することを楽しみにしているひとりです。お世辞にも女性の手のようにすべすべしてはいま

せんが、ごつごつした年輪を思わせる手は、長い年月の間培われた人間の深みを感じさせ、暖かさと人を安心させるものがあります。

人と握手をすることは、教員にとって日常当たり前のことのように思いますが、私には人との心の触れ合いのような気がしてなりません。人の出会いはたった1度しかないかも知れませんから、特にそれを大切にしたいと考えています。握手がどこで、またいつの時代から始まったのか知る由もありませんが、すばらしい習慣だと思います。このすばらしい習慣を大切にして、その心の触れ合いを大事にしていきたいと思います。（にしもと・こうじ 1956年生まれ、書記補助）

光ワード部に集えて……

ブライアン・ラーソン



約 8カ月前に、私たちは光ワード部に転入してきました。このワード部の会員として過ごしてきた8カ月間は、私たち家族にとってまさに成長、チャレンジの時であり、幸福の時でした。愛は言語を越

えてすべての人々が理解できるものだ、と言います。私たちにはその意味がよく分ります。たとえ私たち家族が日本語を話せなくとも、光ワード部の方々の愛をよく感じられるからです。光ワード部の人々は、日

本人もアメリカ人も中国人も同じように温かく迎え入れてくれるのです。

私の4歳になる娘は、とてもすばらしプライマリーの先生に教えていただいている。1歳になる息子は、皆さんにお世話をなっています。私たち家族はみんな、この光ワード部に来れたことを感謝しています。（ブライアン・ラーソン 1959年生まれ、第1副監督）

光の子

今岡 みどり



私 は、広島に転入して8年になります。その間光ワード部は何度か分割、合併を繰り返してきました。私が初めて光ワード部にやって来たときは、まだ東支部と呼ばれており、その後約2カ月ほどして広島ステーキ部が組織され、東支部は現在の光ワード部となりました。

こういう名称がつけられたのには、理由がありました。光ワード部の所在地が光町という場所であることも由来のひとつですが、もうひとつの理由は「光の子となるよう」いう思いが込められていたからです。

振り返えてみると、いろいろな経験が脳裏に浮きます。まだ東支部だったころ、みんなが様々な品を持ち寄ってバザーをし、そのお金で新品のピアノやオルガンを購入することができました。礼拝堂でこれらの楽器を見るたびに、バザーの光景を思い出します。また、会員の増加で分割の時期を迎えたころ、光ワード部と中央支部が組織され、支部の会員となった私たちは朝9時から12時まで安息日の集会を行ない、月に1度は午後から全員で伝道しました。支部になってしまったさびしさと1日も早くワード部にしたいという熱意が倒錯

していました。また、ひとつの建物を二つの地区で使用することに不慣れな私はずいぶんとまどったものでした。しかし、皆良い経験であったと思います。また、多くの若い会員が伝道に旅立って行きました。

光ワード部の建物は元喫茶店だったということもあって少々風変わりですが、私はこの建物が好きです。内部改装のとき、みんなでペンキを塗ったり、ゴミを片付けた思い出は建物に対する愛着を一層増してくれました。

光ワード部では現在、第1日曜日の朝に山に行って奉獻の祈りをします。監督会や宣教師の方々の証を聞き、そこでひざまづいて祈るとき、主の愛と助けを感じ、これからもさらにみんなで前進していくことを、決意を新たにしています。（いまおか・みどり 1962年生まれ、ステーキ部初等協会第1副会長）



エライジヤ のみたま

ルイス・ロベルト・テルターノ

死を前にしたひとりの男性の願いが、4世紀にわたる家族の歴史の探求をさせることになりました。

彼はその訳が明らかになる日を望みつつ、 30年間ひたすら探求を続けたのです。

ルクイズィメト（ベネズエラ）地方部の地方部長として、私は常々会員たちに家族の歴史の探求を勧めてきました。私は自分なりに家族の記録の探求に力を入れてきてはいましたが、両親と祖父母の記録の一部が生まれ故郷のペルーにあったため、行き詰まっていました。当地の親戚から努めて情報を入手しましたが、教会員でない彼らの関心は薄く、思うような援助がなかなか得られませんでした。何といっても一番の問題は、私の先祖がヨーロッパの出身であるということで、私にはヨーロッパまで行くお金もなく、彼らがヨーロッパのどこの出身なのかも知りませんでした。

その後、私は仕事でバレンシアという町を訪れるようになりました。それはちょうど私自身が、教会に対する証をなかなか得られず、またほかの問題もあって大きな試しを受けているときでした。私は、バレンシアの町には私の姓と同じケバ・デ・デルターノ・イ・バステラという作家がいることを知っていました。地元の会員のひとりボブ・スティールハートの助けを借り、私はデルターノの書いた書物から彼の居所をつきとめることができました。初めて彼を訪ねた日、あいにく彼は奥さんと外出していて留守でした。しかし娘さんはからいで、私たちはその晩遅く会えることになりました。

再度訪ねた私たちは、そこで特別な夕べを過ごしたのです。話はすぐに先祖のことになりました。私たちは同じ姓でしたが、彼はスペインのバスク人で、私はペルー人でした。彼が見せてくれた系図に、私は驚かずにはいられませんでした。何とそれは1500年代にまでさかのぼるものだったのです。それ以上に私が驚いたのは、その記録を収集するにいたった彼の話でした。

話によると、カトリック教会の大修道院長だった彼の大伯父が、死の床でデルターノに家族の歴史に関する記録を集めるように頼んだというのです。デルターノは、死にかけた人が口走るうわ言だろうと思いながらも、大伯父にそれを約束したのです。その約束を思い、しばらくして彼

はデルターノ家の系図探求に乗り出したのです。情報収集中に、彼はかなりの時間と労力とお金を費やすことになり、幾度となくこの仕事を投げ出したいと思いました。ところが、それをやめてしまおうと決めた日、彼は約束を思い出すように促す大伯父の夢を見たのです。

こうして彼は、世界中に散在するデルターノ家を探し求めて、30年間探求を続けてきました。デルターノには、死を前にした人と交わした約束を果たすということ以外、その仕事を続ける理由はまったくわかりませんでした。彼はその訳が明らかになる日を望みつつ、ひたすら探求を続けたのです。

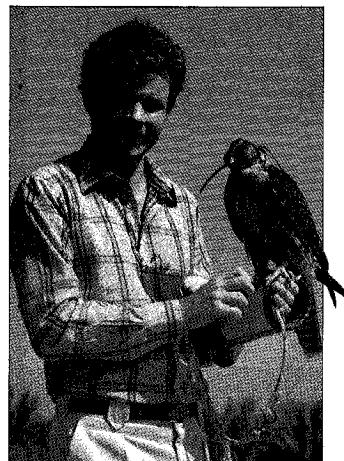
私は、教会のことと神殿で行なわれる死者のための身代わりの業の目的について話しました。そして、靈界で福音を説いた救い主について書かれている「ペテロの第一の手紙」の3章18節から20節を読み、また福音を受け入れた靈たちが味わう喜びと、私たちなくして進歩することのできない彼らが、子孫に忘れられないことを願っている気持ちが記されている「死者の贖いに関する示現」の一部を引用しました。

デルターノは、それまで続けてきた探求の意味を知り、大変喜んでくれました。63歳を迎えた今、彼は大伯父から与えられた使命をやっと果たすことができたのです。彼は私に、手元にあるすべての誕生と結婚の記録と世界中の他のデルターノ家の人々の名前と住所をくれました。記録の中に、共通の先祖を見いだすことができた私の心は喜びに満たされました。こうして私は、私の家族の木を彼の木に接ぐことができたのです。

デルターノは私に彼の著書を1冊プレゼントしてくれました。それには直筆でこう記されていました。「ルイス・ロベルト・デルターノおよびローザ・リリアナへ。あなたたちは、私が一生かけて探し求めてきた親戚です。確かに何らかの力が私たちを引き合わせてくれたのです。ケバ・デ・デルターノ・イ・バステラ」□

信仰のオアシス

ジョセフ・B・プラット



これまでの12年間、私たちは故郷のアメリカから遠く離れた地、アラブ諸国に住んできました。孤独感や恐れさえ感じる経験をしましたが、それは私たち家族に成長と靈的進歩をもたらしました。

イスラム教文化が、私たちの教会員としての生活の助けになっていたのです。そのうえ、人々の温かな愛や思いやりは世界の至る所で見いだせることも知りました。

当初、私たちの計画では、ニューヨークのコーネル大学での野生動物管理の研究終了後、アメリカ西部の学校で教職に戻る予定でしたが、驚いたことに、最初にバーレーン、次にドバイと、アラビア湾に面した諸国で野生動物管理の研究を生かす機会がもたらされたのです。

アラビア半島では今でも、訓練された鷹を使って鳥や獣の狩猟をする古代のスポーツである鷹狩りが行なわれています。1976年、バーレーンの皇太子殿下シャイク・ハムド・ベン・イサ・アルカリファは、捕えた鷹の飼育に現代の管理技術を適用する方法を求めていました。彼は、私の鷹の研究における博士としての業績を知り、その仕事を私に提供したのでした。

バーレーンは、それほど大きな石油生産国ではありませんが、1932年にアラビアで初めて石油が発見されたときに、この国はすでに存在していました。統治者たちは、国民の生活向上のため、得られた富の使い方には慎重を期してい

ますが、その貧富の差は、私に非常に劇的な印象を残しました。ある日教会の集会へ向かう途中、路上で信号待ちをしていたときのこと、目の前の豪華な自動車が目を引く一方、私の車の後には荷馬車のろばが頭をこすりつけていました。

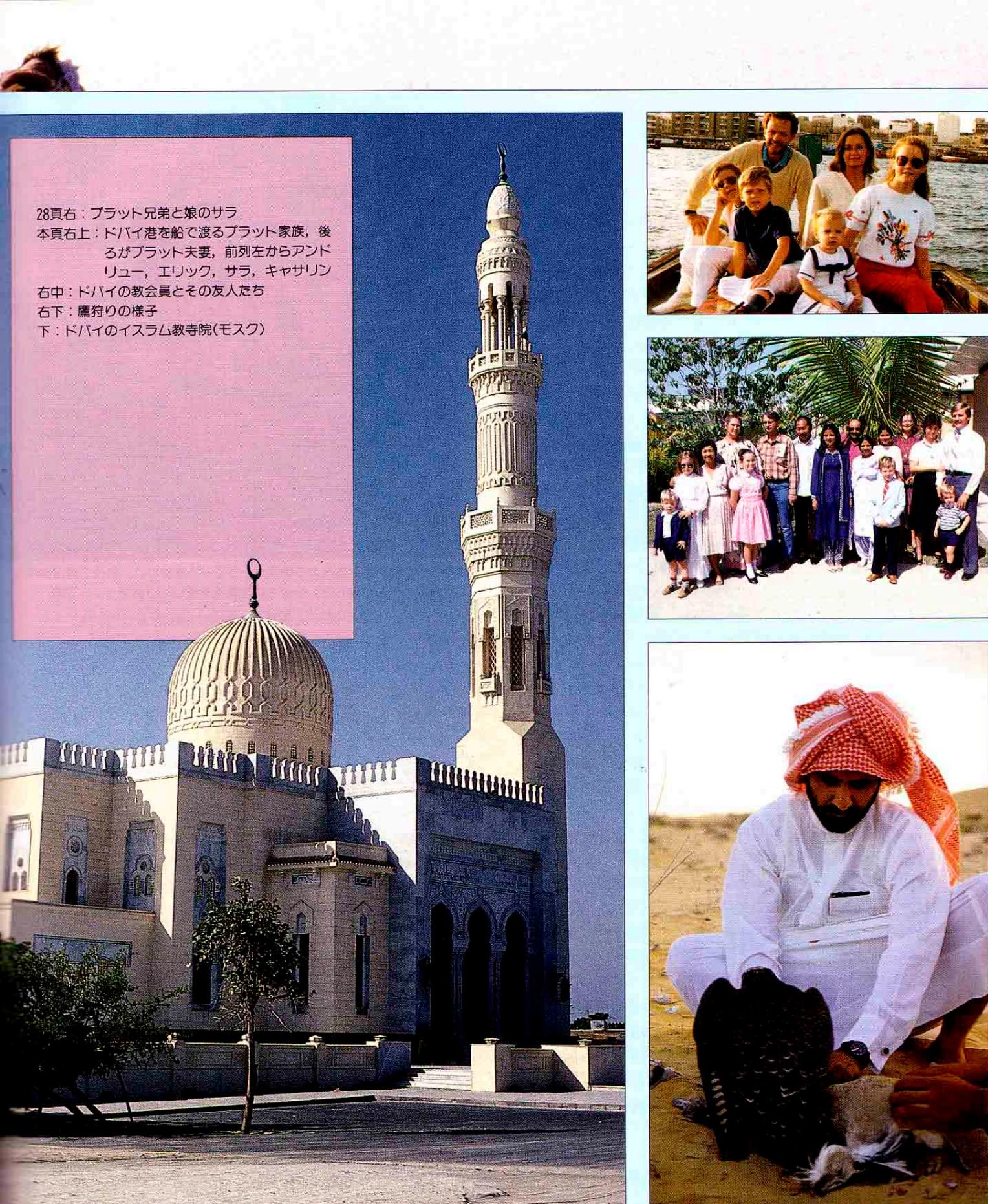
バーレーンの人々は、近代化された生活によくなじんでいますが、いまだに日常生活のすべての面においてイスラム教の教えが強く根付いています。彼らは友好的で穏やかな人々で、神が実在し、自分たちの必要なものを知っている、と信じています。

ベールで顔を覆った婦人たち、青空市場、砂漠の古代の生活様式とは対照的な富と贅沢。バーレーンでのすべてが異質と思われるそのまっただ中にあって、私たちは、末日聖徒の温かさに触れました。他の西側からの3家族を含め、私たちは大人8人子供8人のグループで毎週教会の集会を開きました。イスラム諸国では金曜日が安息日なので、礼拝は金曜日に行なわれます。彼らにとって日曜日は単に6日間の平日のうちの2日目に過ぎないのでした。

バーレーンのこのグループは、ニューメキシコ出身のシドニー・マギル兄弟を初の支部長とし、1978年に支部として組織されました。支部の会員数は、ほかの末日聖徒の転入に伴ない、今では35人に増加しています。

バーレーンで5年余り過ぎたころ、妻も私も自分が設立





28頁右： Pratt兄弟と娘のサラ

本頁右上：ドバイ港を船で渡る Pratt 家族、後

ろが Pratt 夫妻、前列左からアンドリュー、エリック、サラ、キャサリン

右中：ドバイの教員とその友人たち

右下：鷹狩りの様子

下：ドバイのイスラム教寺院(モスク)

した鷹の飼育センターでできることはすべてやり尽くしたと感じていました。アラビア半島のさらに南に位置するアラブ首長国連邦のひとつであるドバイで、似たような仕事に空きが生じたのは、私たちがちょうどアメリカへの帰国を考えていたときでした。私の雇い主は私のためを思い、やさしく私に言いました。「私たちは、あなたをバーレーンの特産物としてドバイに送りたいと思っています。」

シェイク・モハマド・ビン・ラシド・アル・マクトゥム殿下の野生動物コンサルタントとしてのドバイ野生動物研究センターでの仕事は、さらに広範囲な動物の研究をするという専門的な仕事でした。

バーレーンとは違い、ドバイはごく最近になって石油で豊かになり、その金額は想像を絶するほど巨額なものでした。1968年には舗装もされていなかった道路に、今では宮殿が立ち並び、その境には海水を蒸溜した水で育てた低木や花が何マイルにもわたり植えられています。

しかし、昔ながらのやり方は忘れられていません。王家の人々は、今でもその民と接しています。週に数回、私の雇い主は、面会を希望する20人から50人の人々のために昼食会を催します。私たちは、床に座り手で食べます。客のうちのある者は、遊牧民族の牧夫であったり、大金持ちの商人だったりします。皆同じような服装をし、全員が非常に丁寧な礼儀を示します。王家を訪れる客は、彼らの抱える問題に対する援助や願いごとを乞うたり、単に忠義を示すためにやってくるのです。

1982年に私たちがドバイに着いたとき、末日聖徒の集会は開かれていませんでしたが、私たちはそこで3人の末日聖徒に会いました。アメリカからの女性がひとりと、フィリピン人の男性がふたりです。聖餐会は、私たちの居間で始められました。我が家子供たちは、自分たちは1年間教会に行かなかったけれど、教会の方で自分たちのところへやってきたと言ったものです。

しかし、1年半の間に、新しく転入してきた人々によって支部の会員数は24人に膨れあがり、1985年には36人にまで成長したのです。集会のためにアメリカンスクールの一部を借りました。そして、私たちの支部は早朝のセミナーをはじめ、年齢別の組織による完全な教会プログラムを催すまでに至ったのです。

私たちが住んだアラブ諸国のリーダーたちは、他国からの就労者がそれぞれの方式で礼拝する必要性は認識していましたが、伝道は容認されていませんでした。それでも時折改宗者が出ていたのです。それは、西側からの就労者の家族



● Pratt兄弟は、古代からのスポーツである鷹狩りに、現代の管理技術を導入する手助けをした。訓練された鷹を検査している Pratt兄弟。

でした。アレキサンダー大王や他の古代の航海者たちの船を迎えたペルシャ湾の水が、私たちの支部のこういった改宗者や子供たちのバプテスマフォントになっています。

私たちの上の子供たち、キャサリンとアンドリューは、まだ幼かったころの1976年に私たちと一緒にバーレーンに移りました。それからエリックとアルカリファがバーレーンで生まれ、サーラがアラブ首長国連邦で生まれ、私たちの家族に加わりました。

人々との交わりに関する限り、この半島での生活は、私たちの家族にとって良い点も悪い点もありました。他の文化圏からの女性は、ドバイの方が半島の他の国よりも制約が少ないと感じるようですが、しかしイスラム教の伝統に従えば、この土地で生まれた女性は自由に男性と共に行動することはできないのです。ある西側社会においては、これは束縛と映るかもしれません、この土地の女性はそのように思っていません。伝統的なイスラム教の規則は厳格です。それは、彼らの間では非常にうまく機能していますが、外国人にとっては、アラブ人の家族をよく知る機会を制限するものもあるのです。

教会の会員はよく、これらのアラブ諸国に在住するたくさんの外国人の家族と友達になります。(技術職に携わっているほとんどは外国人であり、現地の人はほんのわずかだからです) 例えば息子のアンドリューの前回の誕生日パーティーに出席した10人は、それぞれ8つの異なる国の子供たちでした。

ドバイの会員にとっていくつかの試しもあります。仕事



日が6日間であるため、湾でのダイビングなどといったレクリエーション活動を楽しみたい人々は、安息日にそうしたことをあきらめなければならないのです。

また私たちの子供は(私たちも)，周囲の人々のあまりの裕福さに困惑することがあります。キャサリンは、宮殿の敷地にある私立の学校に無料で入学できるように選ばれた80人の少女のうちのひとりでした。これは皇太子が自分の娘たちに西側の教育を施そうと設立したものです。そこは、イギリスからの教師によって編成され、他の私立の学校とほとんど同じように運営されています。—所有のジェット機で1ヵ月間のヨーロッパ見学旅行に行くことを除いては。

しかしある意味では、ここの教員は、世の多くの悪から守られています。これらのアラブ諸国の統治者たちは、イスラム教やその信者の信仰を脅かすようないかなる活動も一切容認していません。たとえば、イスラム教の教えに反する麻薬やアルコール類の乱用、ポルノ、わいせつなどは厳格に取り締まられています。法律でこれらのことが禁止されていることが、人によっては束縛されていると感じるかもしれません、私たちはそれによってもたらされる自由を満喫しています。私たち大人は、悪い環境と戦う必要もなく、子供たちが学校でそういったものから影響を受ける心配もないのです。

アラビア半島に住む末日聖徒や他の外国人就労者は、イスラム教の教えによって受ける影響をいつも実感しています。テレビや外の活動は、午後と夕方の祈りの呼びかけで中断されます。公的集会は、コーランを読むことから始め

られます。この書物は、予言者モハメッドに与えられた示現であるとイスラム教徒が信じているもので、この宗教を信ずる国々のすべての法律の基本となっており、日常生活の明確なガイドラインが書かれています。

手厚いもてなしは、イスラム教の基本的な原則のひとつです。社交やビジネスでの交流の場では、アラブ人は客に対して心からの配慮を示し、客が彼らの出すコーヒーやお茶を受け入れるように期待します。この礼儀作法は、—宮殿でのサウジアラビアの王からキャンプファイヤーを囲んでいたラクダの牧夫にいたる—アラブの人々に知恵の言葉を説明する機会を私に与えてくれました。彼らはそれによって気分を害することなく、私の信仰を受け入れてくれました。なぜなら、これは豚肉とアルコール類をとらないという彼らの健康に関する教えに類似しているからです。厳格なイスラム教徒は、たばこも吸いません。

かつて、私の雇い主の依頼で、彼と共に別のイスラム教国の統治者を訪問したことがあります。私たちは、王家の人々や政治家たちの小さなグループと同席しました。宮殿で食事をし、すぐさま統治者の別室へ移りました。そのときのある食事の最中、数人のイスラム教徒がワインを注文しました。私がそれを辞退すると、だれかが私がイスラム教徒になったと冗談を飛ばしました。それで私は、自分の宗教上の教えのために飲まないことを説明したのです。するとそれが彼らの気にさわり、ふたりの男性がさかんに私を説き伏せようとした。このとき、私の雇い主であったバーレーンの皇太子殿下が彼らを鎮めました。そして私に向かって言いました。「ジョー、その態度をいつまでも変えないでいなさい。」それからというものの、私は自分の雇い主が自分の信仰の価値を認めてくれたことに対して感謝の気持ちを抱き続けています。

外国の文化の中で客として生活している教員は、全住民の少数派であり、故郷の親しんできた物から遠く離れ、困惑し孤独を感じがちなものです。しかし、教会はいつもそこにあります。家族と一緒にあってもなくても、天父の愛や福音の原則の力や聖霊の助けは、礼拝の人数や周囲の環境により制限されることはないということを思い出し、慰めを得ることでしょう。あなたの家庭に礼拝の場を持つと努力するなら、みたまはそこにおいでになるのです。

□

*この記事が書かれたとき、プラット兄弟はドバイ支部の支部長であった。

アーナー



・カーバルホ

父親、監督、そして判事

ドン・L・サール

この訴訟は、ポルトガルの労働判事であるアーサー・マヌエル・ペントウラ・デ・カーバルホを悩ませていました。ある雇い主が、使用人の青年に合法的な賃金を支払わなかったという理由で起訴されていたのです。しかしその青年は、20代後半であるにもかかわらず、精神薄弱のため、ほかの使用人と同等の仕事をこなすことができませんでした。雇い主は、青年が自分の母親を養わなければならぬ立場にあることに同情していましたが、もし賃金を上げることになれば、彼を解雇しなければならない状況にもあったのです。

連邦法からすれば、判決は明白なものに思われました。「ですが困ったことに、この件に関してどこか間違っていると感じたのです。そこで祈りました。すると、突然答えが与えられたのです。」その青年は法律で定められている最低賃金を受ける年齢に達してはいたが、彼の精神年齢や仕事の能力から判断して、成人の受けるべき賃金レベルに達していることを正当化するのは困難である、というのが彼のとった見解でした。その結果、その雇い主は法的な制裁を免れることができました。青年は仕事を続け、一方感謝した雇い主は、さらに青年が以前よりも楽に母親を養うことができるようになると、賃金を上げたのです。

カーバルホ兄弟は、もしみたまと波長を合わせるならば自分が直面している問題について導きを受けられることを

理解しました。

「裁決がむずかしいとき、私は主に祈ります。すると、特別な方法で助けを受けるのです。」

たとえば、あるとても複雑な訴訟のこと、「私はどのような判決を下したらよいかまったく見当もつきませんでした。法的な知識は十分でした。でもどうしたらよいかわからなかつたのです」と、彼は述懐します。彼がその一件について祈ると、問題を明らかにするある特別な見解が彼の脳裏に浮かびました。後になってある弁護士は、判事が非常に明確にその点を見極めたことは見事であると賞賛しました。しかし、カーバルホ兄弟は言います。「私は主から導きを受けたことを強く確信しています。」

リブソン第2ワード部の会員たちは、判事アーサー・ベントウラ・デ・カーバルホの監督という別の面を知っています。これは彼が、1979年半ばに改宗してから受けた、ふたつのステーキ部の副ステーキ部長の職を含む、指導者としてのいくつかの召しのうちのひとつにすぎません。

しかし、1979年の春、宣教師が初めて彼の家のドアをノックしたとき、自分が将来の監督になろうとは思いもしなかつたことでしょう。

「どの神のことですか。」神を信じているかどうかという宣教師の問い合わせに対して、彼は聞き返しました。それは無信仰な人間の問い合わせではなく、むしろ様々な宗教を勉強しなおかつ、なぜそれほどまでに多くの異なつた神の概念があるのか理解できないでいる人の持つ疑問でした。宣教師がキリストのことを説明すると、彼は心を動かされ聞き入ったのでした。

「私が福音を受け入れができるようにと、神様が私に何年もの猶予をくださったのだと信じています」と、彼は言います。彼も彼の妻も、自國の主立った教会の教義は信じてはいませんでした。ふたりとも真理を求めていたので、受け入れる準備はできていました。彼は独学で、神は肉体を有しておられることをすでに確信していたのです。

また彼は宣教師から、末日聖徒イエス・キリスト教会は、かつてキリストが組織した教会と同じように使徒や予言者のいる回復された教会であることを学び、深い感銘を受けました。

ワインの産地であるポルトガルで、知恵の言葉を守り通すのは、問題を生じがちかもしれません、カーバルホ兄弟にとって、時折のつき合いで飲む程度の酒を断わることは何の支障もありませんでした。加えて彼は、たばこは体に悪いと常々考えていましたし、什分の一を納めることで主の業を助けることは特権であると感じました。

カーバルホ監督は理想的な家庭の中で育ったわけではありませんが、教会に入ってからは、良い父親、良い伴侶になる方法を学んでいます。「私は父親としての責任を理解していました。疲れきって仕事から帰宅したときなどは、自分のことしか頭にありませんでした。」

「福音は、私に道案内をしてくれる光のようです。私は人間として、父親としての目的を理解し始めたところです。」

さらにカーバルホ監督は、妻とふたりの子供たちの助けなくしては、たくさんの仕事や教会の責任を果たすことはできないこと、また神殿の業は、彼にとって大変重要なものであり、スイス神殿の結び固めの執行者として召されていることはすばらしい祝福であると語ります。ポルトガルの神殿団体参入でスイスに行くとき、彼はその務めをはたすことになるのです。

「私にとって、福音は明解なものです。靈感を受けた主の僕の指導のもとで主に仕えることは光栄なことです。」彼の監督としての主な目的のひとつは、福音とは兄弟姉妹に奉仕することであるということを会員ひとりひとりに教えることなのです。

カーバルホ監督は、キリストの模範に従う努力を通して祝福がもたらされるということを、経験を通して知ったのです。□

家庭訪問メッセージ

「愛は、不義を喜ばないで 真理を喜ぶ」

目的：真理を愛し、受け入れ、喜ぶ

使徒パウロと予言者モルモンは、愛は「不義を喜ばないで真理を喜ぶ。」(Iコリント13:4-6; モロナイ7:45参照)と言っています。私たちは、現世では「すべての物事には必ずその反対のもの」があることを知っています。(IIニーファイ2:11)しかし、パウロとモルモンが不義と真理を対比しているのはなぜでしょうか。彼らはなぜ、愛は「不義を喜ばないで、善を喜ぶ」と書かなかつたのでしょうか。

その答えは聖典の中に見つけることができます。教義と聖約93章には、「光明と真理はかの悪魔を棄つ」(37節), 「かの悪魔來りて……光明と真理を取り去りぬ」(39節)と書かれています。また、申命記32章4節には、「主は真実なる神であって、偽りなく」と書かれています。不義が栄えれば、真理が衰退し、逆に、真理が栄えれば、不義はその力を失います。

このように、私たちは義と真理を求めることにより、さらに真理と光とを受け(教義と聖約93:28), もっとキリストに似た者となることができるのです。聖典には、キリストは「真理の光」(教義と聖約88:6)であり、「神の栄光は英智なり。すなわち、光明と真理なり」(教義と聖約93:36)と書かれています。

真理を求め、不義を避けるには、まず自分自身の行動を吟味しなければなりません。私たちは、テレビ、映画、雑誌などの不健全な描写が自分の思いを汚すままにしてはいないでしょうか。

粗探しも、「不義を喜ぶ」ことに通じる面があります。家族の中にそのような傾向があることを心配している母親がいました。10歳になるある男の子は弟を「いくじなし」と呼び、父親も十代の子供たちを「ぐうたら」と呼んでいました。そして母親自身も、バスルームの掃除をしないという理由で「どうして言うことが聞けないの。まともなことが何もできないんだから」と、娘をしきりつけるようなことがたびたびありました。

彼女は、そのことを気にはしていたものの、自分からは

何もできないと思い込んでいました。しかし、よく考えてみると、家族は皆神の子であり、大切に扱い敬わなければならぬという真理を実践する方法はたくさんありました。彼女は家族をほめるように心がけ、祈りの中でも、一人一人の子供について天父に感謝を捧げ、それぞれの働きを認めるようにしました。そして、家族の短所ではなく、長所を見つけるように努力したのです。数週間たって、彼女は自分の努力が実を結びつつあることに気づきました。家族の間に協調性が生まれ、お互いに助け合うようになってきていたのです。

真理を喜ぶには、真理をどう用いるかにも注意しなければなりません。人の過ちや失敗をうわさ話の種にするようなことは、自分自身を神から遠ざけ、ひいては、最も助けを必要としている人に愛と交わりの手を差し伸べる道を、みずから閉ざしてしまうことにもなりかねません。

ダリン・H・オーカス長老は次のように言っています。
「たとえ事実であっても、それを悪い動機をもって人に話すのはよくないことです。……たとえ事実であっても、過ちをことさらに取りざたすならば、兄弟や姉妹の心を傷つけてしまうことになります。……たとえ事実であっても、人と時を考えずに、それを触れ回るのは決して正しい行為とはいえない。」(「エンサイン」1987年2月号, p.69)

真理を受け入れる人は、さらにキリストに似た者となり、すべての兄弟姉妹に対し、慈愛、すなわちキリストの純粋な愛を抱くようになるのです。□

訪問教師への提案

1. どうすれば不義を喜ばず、真理を喜ぶようになれるかを話し合う。
2. 真理の原則によってだれかを助けることができた経験があれば、それについて話し合う。またそのように行なうように勧める。

(「家庭のタベアイデア集」pp. 15, 257-59, 265-320参考)



純潔の律法

モルモン經の中で予言者ヤコブは、主がその子らの貞節を喜んでおられる、と語っています。（ヤコブ2：28参照）愛する兄弟姉妹の皆さんはこのことに気づいておられましたか。主は私たちが貞節であるとき、ただ単によしとされるだけではなく、ことのほかお喜びになるのです。モルモンは息子のモロナイにあてて、貞淑は「最も貴くまたほかのあらゆるものよりも重んすべきもの」と、書き送っています。（モロナイ9：9）

純潔の律法は、永遠に変わることのない大切な原則です。私たちは、決して世の多くの声に惑わされてはならないのです。主の声に耳を傾けなければならぬのです。そして、主の戒めを守って行こうと決心する必要があるのです。

世の中ではすでに、道徳的標準と呼ばれるものはすべて捨て去り、このことから生じる実を刈り取り始めています。その一例として、エイズ（後天性免疫不全症候群）があります。効果的な治療法が早急に発見されなければ、かつて世界を震撼させた黒死病や天然痘、チフス等とは比較にならないほど世界中に蔓延するであろうと、保健衛生関係の専門家は語っています。

この疫病はもともと、同性愛者の間から発生したもので、世の人々は、その治療法を求めてやっきになっていますが、決して神に目を向けようとはしません。多くの公的および私的研究機関がエイズに取組んでいます。そして、研究費の増額を求め、教育と宣伝のプログラムを主催し、また、罪のない子供たちをこの影響から守るためにチラシを作っています。そして、すでに感染した人々に対しては治療プログラムを用意しています。これらは重要なことであり、また必要でもあり、私たちもその努力を賞賛するものではあります。しかし、なぜ貞節を見直すようにという声を、また神に対する徳と忠節を尽くすようにという声を聞かないのでしょうか。

不道徳への誘惑

私は、性的な罪を犯した人々のほとんどが、人間の基本的欲求を満たすうえで誤った方向に行ってしまった人だと思います。私たちすべては愛されたい、価値を認めてもらいたいという欲求を持っています。また、生活の中で

この時代に入って、主はシナイで与えられた戒めを、次のように繰り返して言っておられます。「姦淫を犯すなかれ。……また何事にてもこれに類することを為すことなかれ。」（教義と聖約59：6 下線補足）時の始めより主は、性的清らかさについて明確で、間違いようのない標準を定めてこられました。それは、過去いつの時代にも存在し、現在にも、また将来のどんな時代にも存在するものです。その標準とは、純潔の律法です。老若男女、貧富にかかわりなく、すべての人に等しく与えられているものです。

大管長 エズラ・タフト・ベンソン

喜びと幸福を得たいと望んでいます。このことを知っているサタンはしばしば、人間の基本的欲求をくすぐって、不道徳な事柄へと誘惑します。そして、悦びや幸福、満足感が得られることを約束するのです。

しかし、もちろんのことですが、これはまやかしです。箴言にはこう書かれています。「女と姦淫を行う者は思慮がない。これを行うものはおのれを滅ぼす。」(箴言 6:32) レーマン人サムエルも次のように言っています。「罪悪をしながら幸福を求めたが、このような行いは……義にそむく。」(ヒラマン13:38) アルマはもっと簡潔に、こう言っています。「罪悪は決して幸福を生じたことはない。」(アルマ41:10)

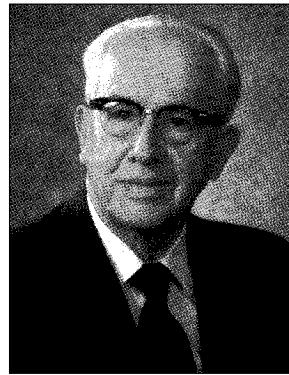
サタンの虚言に惑わされないでください。不道徳に永遠の幸福はないのです。純潔の律法を犯すことから喜びは得られないのです。まさにその反対なのです。一時の快楽はあるでしょう。しばらくは、何事もバラ色に見えるかも知れません。しかし、そのつながりは、またたく間に崩れ去り、残るのは罪と恥辱だけです。自分の犯した罪が暴かれるのではないかと、恐れるようになります。人の目を盗み、隠れるようになり、嘘つき、欺くようになってしまいます。愛は、破局へと向かって歩みだします。苦々しさ、嫉妬、怒り、それに憎しみさえも頭をもたげてきます。これらすべてが罪、すなわち律法を犯すことの典型的な結末なのです。

逆に、純潔の律法を守り、自分自身を道徳的に清く保つならば、愛と平安は深まり、伴侶に対する信頼と尊敬も増し、さらに互いに対する忠誠を深めるという祝福も受けるでしょう。その結果、私たちは、深遠でかけがえのない喜びと幸福を味わうことができるようになるのです。

世の人々はこの罪について軽く考えていますし、罪がもたらすものについてもそう重大だと思っていません。でも私たちは、そうした考えに惑わされてはならないのです。

貞節に対するひとつの標準

貞節であることについて厳粛に述べているものの中に、アルマが息子のコリアントンへあてたものがあります。「わが子よ。罪のない者の血を流すことと、聖霊に逆らうこと



とを除いて、このような行いはあらゆるほかの罪以上に、主の目から見て憎むべき行いであることを知らないか。 (アルマ39:5下線補足) 私たちの内で、殺人の罪や聖霊に逆らう罪を犯すような人は、まずいないでしょう。しかし、純潔の律法はしばしば破られています。しかもこの罪は、神の目から見てふたつの重大な罪の次に重い罪なのです。

愛する兄弟姉妹の皆さん、皆さんにはこうした聖典の言葉に従った生活を送っていますか。皆さんには性的な罪が重大



私たちは、自分自身を道徳的に清く保つならば、愛と平安を増し、深遠でかけがえのない喜びと平安を味わうことができます。

な罪であることをはっきりと理解していますか。皆さんはこれらの律法に従うことによりもたらされる祝福を、いつも考えていますか。私は、私以前のすべての予言者と同じくもう一度申しあげます。貞節にはひとつの標準があり、すべての人はこれに忠実であるようにと望まれています。主がひとりに言われたことは、すべての人に言われたことなのです。「つづけてわが前に徳と聖きを行いに表さざるべからず。」（教義と聖約46：33）

次のような古いことわざがあります。「備え防ぐ方が、後悔して償うより楽だ。（備えあれば憂いなし）」このことは、なんとよく純潔の律法に当てはまるでしょう。私たち自身を道徳的に清く保つための最善の策は、誘惑に陥らないために自分自身を備えることであり、罪を犯す可能性から離れることです。

汚れなく貞潔な皆さんに対して私は、このような罪に陥らないように備え、罪を遠ざけるための6つのステップを紹介しましょう。

1. 今すぐ、清くあろうと決心する。

清くあろうと決心するのは一度でいいのです。今すぐ決心をしてください。そして、それが決して揺らぐことのないように、深く決意してその決心を確実なものとしてください。時期を逸しないでください。今、決心してください。

2. 思いをコントロールする。

どのような不道徳も、突然に始まるわけではありません。不道徳の最初の種はいつも、心の内に蒔かれるのです。私たちの心の中に俗悪で不道徳な事柄の入り込むすきを作るなら、それは不道徳への道に一步を踏み出したことになるのです。私は特にポルノ雑誌の悪について警告いたします。私たちは何度も、深い罪に陥った人々の最初の一歩はポルノ雑誌によるものである、と耳にしています。主は、情欲をいだいて女を見る者、言い換えれば、思いをコントロールできない者は、すでに心の内に姦淫をしている、と教えておられます。（マタイ5：28；教義と聖約63：16参照）

3. 誘惑に耐える力を得るために絶えず祈る。

誘惑は私たちすべてを襲います。いろんな形や見せかけの姿をとって現われます。しかし主は、それに対抗する鍵

私たちに与えてくださいました。主は、予言者ヨセフ・スミスにこのように言っておられます。「勝利者たらんことを常に祈るべし。誠にサタンに打ち勝つ様に祈れ、また現にサタンの仕事に力を与うるサタンの僕らの手より免れんことを祈るべし。」(教義と聖約10:5)誘惑に、特に純潔の律法にかかる誘惑に打ち勝つために絶えざる力を求めて主に願うことを、日々の祈りの一部としなければなりません。

4. 既婚者は、あらゆる類のみだらな行ない、軽率な行ないを避ける。

ある国々では、世の習慣として、既婚の男女が浮気をしたり、異性をからかったりすることに寛大であることがあります。社交の場が設けられたり、長時間共に過ごすことがあります。どのケースについても、世の人々は、自然な友情の表現であると合理化します。しかしながら、異性とたわむれたり、あるいはただ単に関心を持つということだけでも、容易に道を誤り、結果として伴侶に不貞を働くことになり得なのです。

次のように自分自身に問いかけてみると良いでしょう。自分の伴侶は、もし自分のしていることを知ったならばそれを喜ぶだろうか。自分が秘書とふたりだけの時間を過ごしていると知ったならば、妻はそれを喜ぶだろうか。自分がほかの男性と親しくしているのを見て、夫はそれを喜ぶだろうか。愛する兄弟姉妹の皆さん、これこそ、パウロの言っていた事柄なのです。「あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい。」(I テサロニケ5:22)

5. 既婚者は、できる限り伴侶以外の異性とふたりだけになることを避ける。

不道徳による悲劇の多くは、男性と女性がふたりだけで職場に、教会に、あるいは車の中にいるところから始まっています。最初はそのつもりではなかったかも知れません。あるいは罪のことなど毛頭考えもしなかったかも知れません。しかしふたりっきりの環境が、誘惑の肥沃な温床となるのです。ひとつのが次のことが次のことへの引き金となり、速やかに悲劇へと発展していくのです。私たちにできる一番簡単なことは、誘惑が生じないように、初めからこのような状況を避けることです。

6. 独身者は、デートのときに楽しく有意義な活動をたくさんできるように前もって計画し、何もすることがなくて欲望に負けてしまうことがないようにする。

否定的なものの入り込む余地のないように、前向きな活動で生活を満たすということが、原則となります。若い人々が長い時間、特別に計画された活動なしで過ごす場合、その空白の時間を埋めるために純潔の律法を破ってしまうこともあります。

皆さんの中には、こうした勧告がもう手遅れだという人もいるでしょう。そのような人は、生活を改善し、罪を悔い改めるしかありません。私はそのような人々のために、清い状態に戻るための5つの大切な事柄を提案したいと思います。

1. 罪の原因となっている、あるいは原因となる可能性のある状況から、少しでも早く離れる。

エジプトでヨセフが、家の中にひとりでいたポテパルの妻のわなに陥ったとき、彼にとって妥協するのは簡単だったと思います。彼が誘惑したわけではありませんでしたし、自分は彼女の僕であり、拒めば主人である彼女の気分を害するであろうと思われたからです。しかしヨセフがその場に止まっていたならば、容易に罪に陥っていたことでしょう。彼がとった行動には、偉大な教訓が含まれています。聖典にはこう書かれています。「ヨセフは着物を彼女の手に残して外にのがれ出た。」(創世39:12, 下線補足)

彼は外にのがれ出ました。愛する兄弟姉妹の皆さん、もし皆さんの清さが今危険にさらされているか、あるいはさらされそうになったときは、ヨセフの模範に従ってください。

2. 主に、打ち勝つ力を願う。

罪に陥れようと誘惑している人に対するサタンの最も効果的な作戦は、耳元にそっと、おまえは祈るに値しない人間だ、と囁きかけることです。サタンは、天父はあなたが嫌いなので、あなたの祈りを決して聞いてはくださらぬだろう、と話しかけます。これは嘘です。サタンは、私たちをだますためにそう言うのです。罪の力は大きなものです。もし私たちが罪から、特に重大な罪から離れたいと願うならば、自分の本来の力よりももっと大きな力を得なけ

ればならないのです。

天父以上に皆さんを罪から解き放とうと思っておられる方はいません。神に祈ってください。あなたの罪を認め、恥すべき事柄とその罪とを告白し、そして神に助けを求めてください。神は、あなたを勝利へと導く力をお持ちです。

3. 罪を解決し、主との完全な交わりに戻るため、神権指導者の助けを得る。

ある種の罪は、教会の会員であることを危うくする重大性を持っています。性的な罪もそうです。(教義と聖約42:24参照)

このような罪を悔い改めるには、主に対して罪を告白して解決を図るだけではなく、教会との間でも同じことをする必要があります。このことは、適切な神権指導者によって執り行なわれます。監督やステーキ部長は、啓示により、教会の見張り番、イスラエルの判士として召されているのです。

罪を許すことは主だけが、おできになることですが、神権指導者は悔い改めの過程における重要な役割を果たしています。たとえ私たちが破門、あるいは会員資格の剥奪を受けても、それは悔い改めの過程の最初の一歩なのです。そしてその一歩を踏み出すのが早ければ早いほど、赦しの奇跡によってもたらされる快い平安と喜びを早く見いだすことができるのです。

4. 神聖な泉の水を飲み、積極的に行動する力を身につける。

ただ単に悪に抵抗を試みる、あるいは生活の中の罪の部分を無にするだけでは不十分です。私たちは、生活を義で満たし、靈的な力をもたらす活動に従事しなければなりません。

私が言っているのは、聖典に対する親しみを深める活動のことです。日々聖典を読み、研究するとき、私たちの生活の内に流れ込んでくる力があります。この力は、ほかのどんな方法によっても見いだすことのできないものです。そしてもう一つの力の源は日々の祈りです。具体的な力や特別な祝福を求めるための断食は、私たちを平常の能力を越えたものに強めます。クリスチャンとしての奉仕、教

会へ出席すること、王国で働くこと、これらはすべて、私たちの力と強さの貯えを増すものです。

私たちは、単に生活から悪い影響を取り去るだけではなく、それ以上のことをしなければなりません。悪いものを、私たちを力で満たしてくれる義しい活動と、私たちが生きるべき道を歩む決意に置き換えなければならないのです。

5. 正しい悔い改めにより、再び清くなることができる。

モロナイは「絶望は悪い行いから来る」(モロナイ10:22)と教えています。不道徳の罠に捕えられている人々は絶望の破壊的な結末を味わっていることでしょう。しかし、それに代わる道があるのです。

真の悔い改めにより必要な代価を支払った者には、この約束は真実のものとなります。皆さん、再び清くなれるのです。絶望を取り去ることができるのです。赦しの快い平安が、あなたの生活に流れ込んでくるのです。

イザヤを通じて言われた主のみ言葉は確かです。「主は言われる。さあ、われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は縫のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。」(イザヤ1:18)

そして、この時代に入って主は、同じように明確にこう語っておられます。「見よ、およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。」(教義と聖約58:42)

前に述べた通り、純潔の律法に関しては、後悔し償いをするよりは、備えをして防ぐ方がはるかによいのです。

愛する兄弟姉妹の皆さん、私たちの天の父は、私たちが幸福であること以外は何も望んではおられません。天父が語られることすべては、私たちに喜びをもたらす事柄です。そして、純潔の律法は、神が与えられた、その喜びを見いだす助けとなる最も確かな原則のひとつなのです。私は心から皆さんに、この律法を守ることの喜ばしい報いと、破ることによる悲劇的結末とを、真剣に考えていただきたいと祈っています。□

*ユタ州プロボ、ブリガム・ヤング大学における説教より採録。

友人の死

ジョン・ベティー・フィッシュ



私は、最近、12歳の少年の葬儀に参列しました。アンドリューはつい最近、執事の職に召されたばかりの、とても明るく元気な子供でした。人気者だった彼の葬儀には、本当にたくさんの友人たちが参列しました。そのうちの半分以上が、教会員ではない彼の友人たちでした。クラスメイト、サッカー仲間、サークル活動の仲間、そのほか、彼を愛する友人が大勢いました。そしてアンドリューを心から愛する兄と弟もいました。

十代の若い子供が命を失うとき、それは不慮の事故がほとんどです。アンドリューの場合もそうでした。わんぱく盛りの少年たちが、海岸の砂山でほら穴づくりをして遊んでいたときのことです。突然、砂が崩れ落ちて、アンドリ

ューが生き埋めになってしまったのです。一緒に遊んでいたいとこやほかの子供たちは、アンドリューを助け出すために泣き叫びながら必死で砂をかき出しました。それは、小さな子供たちにとって、またすんでのところで助け出されたアンドリューのお兄さんにとっても、一生忘れることのできない恐ろしい出来事でした。両親のショックがどれほど大きかったか理解できると思います。

アンドリューの家族と親友たちが棺の中のアンドリューに最後の別れを告げるとき、ライアンという友達はしゃくりあげるばかりで言葉が出ませんでした。私はライアンとアンドリューがサッカー仲間の大親友であることを知っていました。ライアンは末日聖徒ではありませんでしたが、



彼の家族は敬虔なクリスチャンでした。13歳の少年にとっては、一番の親友を、死によって失うなどとは、思ってもみないことだったでしょう。ライアンは声をあげて泣き続けました。一番の親友を失ったのです。彼の父親の慰めも、アンドリューの父親の慰めもライアンにとっては助けにならなかつたようでした。

この光景を目にした私の脳裏に、自分自身のあるひとつの経験が鮮明に浮かんできました。30年も前のことになりますが、私にはピーターという大の親友がいました。私たちは、おもちゃも、ペットの動物も、お菓子までも、何でもふたりで分け合うほどの仲良しでした。彼と私は全然似ていなかつたのに、なぜあんなにも気が合つたのでしょうか。彼は、父親似の金髪で小柄な子でした。私もやはり父親似ではありました。大柄で、ひょろっとした黒髪でした。彼はバニラアイスクリームが大好物で、私はチョコレートアイスクリームが大好きでした。私たちは学校が終わると、いつも岩陰の秘密の隠れ家まで青トカゲを捕りに行きました。

た。私たちは、青トカゲ捕りの名人だったのです。

私は10歳になるまで、ピーターが生まれつき心臓に病気をもっていることを知りませんでした。彼が喘息持ちで、ときどき、咳をするとゼイゼイしていたのは知っていましたが、私たちの遊びには何ひとつ障害になつていませんでした。私が彼の病気について気づかなかつたのは、彼自身、病気のことを全然気にしていなかつたからです。

彼の両親は、ピーターが心臓手術に耐えられる年齢になるまで手術を待っていましたが、彼の主治医は、これ以上は待てないという判断を下したのです。それで両親は、十分な設備のある町の大きな病院にピーターを入院させました。

病院からの彼の手紙には、手術の前に彼が手術室や回復室も含めて病院中を見学して回つたことが書いてありました。手術のあと、麻酔から覚めたときに怖がらないようにそうしてくれたのです。

数日後、ピーターは10時間にも及ぶ大手術に臨みました。しかし信じられないことに、ピーターは手術台の上で息を引き取つたのです。私にとって彼の死は、本当に衝撃的でした。私は手術が成功するようにと、全身全霊を込めて熱心に祈り続けたのです。私の祈りは聞き届けられなかつた……。そう思った私は本当に失望し、悲しみをこらえることができませんでした。葬儀から帰つた私は、ピーターとふたりでよく青トカゲを捕りに行った川べりの隠れ家まで、ひとりで出かけて行きました。そしてふたりでよく遊んだその隠れ家を、あとかたもなく崩しました。ピーターのことを思い出させるものを目の前から消してしまえば、恐ろしいほどの悲しみも消えてしまうだろうと思ったのです。

でもあとで、こうした気持ちは自然なものだということがわかりました。私はピーターを愛していました。それが

いなくなつたのですから、悲しくなるのは当然です。何も悪いことはないのです。

私は、アンドリューの死も心から悲しく思います。このようなことはよくあることです。天父は私たちに良い友人を決して忘れないように望んでおられます。聖典にはこのように書かれています。「汝相愛して共にこの世に生きよ。されば死にたる者を失いたるために涙を流し、ことに栄光ある復活の望みを有たざる者のためにいよいよ嘆き悲しめ。」(教義と聖約42:45)

私は、ピーターの死から1カ月間は毎日、ピーターのことを考えていました。しかしやがて、新しい友人ができ、新しい生活が始まると、彼のことを時折思い出すくらいになりました。10年たった今では、ひと月に1度思い出すか出さないかといった程度です。でも、1度彼のことが脳裏をかすめると、楽しい思い出がせきを切ったように心にわきあがってくるのです。

今から1、2年前、ピーターの死から30年が過ぎようとしていたある日、私はピーターの夢を見ました。私は、海辺のハイウェイを車で走っていました。とても美しいカリフォルニア北部の景色が広がっていました。私は、美しい海辺の景色を眺めながらカーステレオから流れる美しい音楽に耳を傾けていました。

すると突然、私は、向こうから歩いて来るピーターに気づいたのです。成長して大人の姿をしていましたが、すぐピーターだとわかりました。

私は急いで車を止めて飛びだし、彼のもとへ駆け寄りました。私たちは抱き合ふと、まるで子供のように喜び合いました。美しい海を背に、腕を組んで見つめ合い、15分近くも話し続けたと思います。

ピーターは自分の死のことは全然口にしませんでしたし、久しぶりだねとも言いませんでした。そのうちにピーター

は、「そろそろ、もどらなければ」と言いました。私は、それが本当のことだとわかり、どこへ行くのかと聞きました。すると彼は、「やるべき仕事がたくさん残っているから」と答えました。私はそれ以上聞くのはやめにしました。彼が天の仕事について話しているのだということを、私の靈と心は、そのとき理解できたからです。アンドリューもきっと同じだろうと思いました。

私は、今でも、あのときのすばらしい夢を、はっきりと覚えています。ピーターと、本当にいろいろなことを語り合いました。私の靈は、私とピーターが、いつの日か必ず再び会えると確信することができました。

アンドリューの葬儀で話す番が来たときに、死は私たちの友情に終わりを告げるものではなく、私たちの愛と友情はこの世から永遠にまで死を越えて続くものであることを、ライアンのために話すようにみたまが促しました。

ライアンを見ると、少し生氣をとり戻し、涙も渴いてきたようです。そして話の間うなずいていました。私はライアンが、みたまによって慰めを受けているのを感じました。

友人の死に直面することは、つらいことです。しかし、福音を心から理解することができるならば、私たちは慰められます。なぜなら、私たちの命は、この世限りではなく、永遠に続くものだからです。この世に残された人の心の痛みは、時間が和らげてくれるでしょう。

若人の皆さん、忠実であってください。いつも、主のみこころのままに生き、祈りをもって生活するならば、私たちは、必ず愛する友と再会することができるのです。友を失った悲しみは、すぐに消し去ることはできません。しかし、天父は私たちに慰めを与えてくださいます。いつの日か、思い出は喜びに変わり、友と分かち合った美しい思い出は、再び私たちの永遠の喜びへと変わるので。これこそが、約束された救いの計画なのです。□

モルモンメッセージ

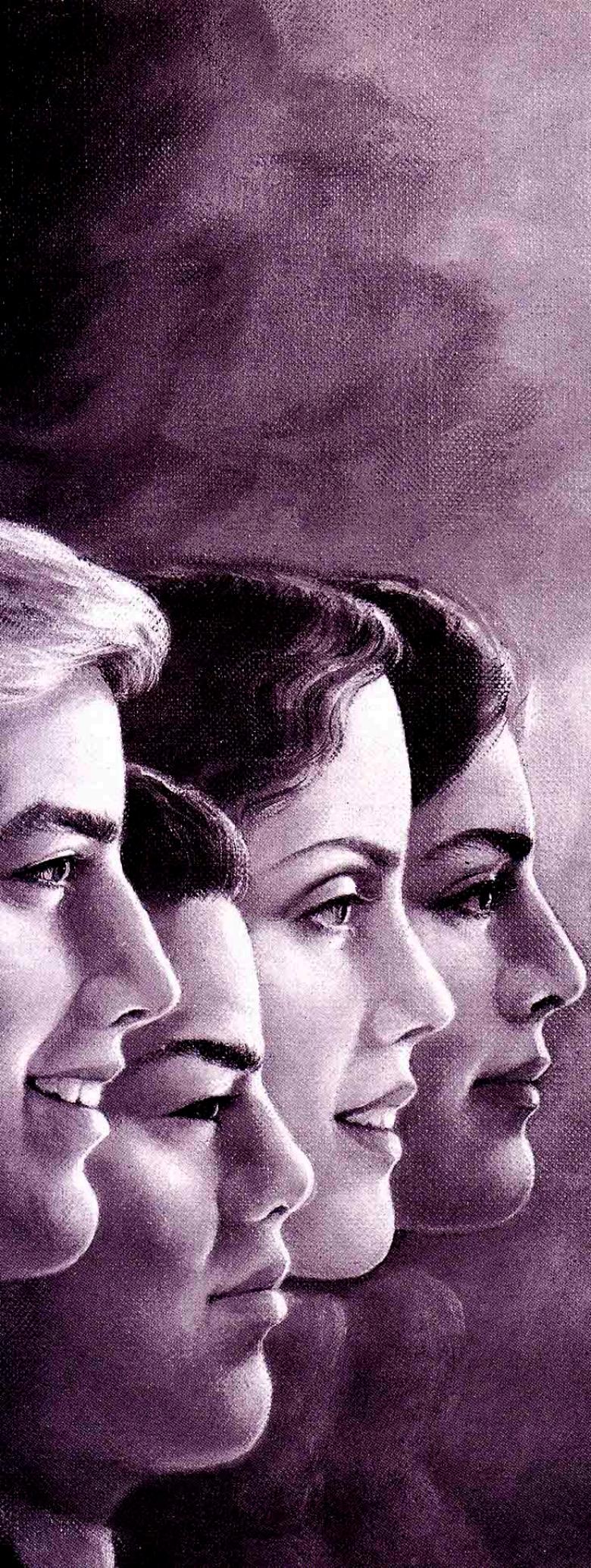
うわさ話



私たちは 主の 証し人です

七十人第一定員会会員 ウォルド・プラット・コール





主はエルサレムで、その弟子たちにこう話されました。「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施（せ）。」（マタイ28：19）今日、主はこう言っておられます。「汝ら全世界に出で行き、一切の生くる者に福音を説き、わが汝らに与えたる権威を以て働き、御父と、子と、聖霊の名によりてバプテスマを施すべし。」（教義と聖約68：8）主は、スペンサー・W・キンボール大管長を通じて、すべての若い男性は伝道に赴くべきである、と言われました。彼らは、もっとよく備えられ、価値ある者とならなければなりません。さらに主は、エズラ・タフト・ベンソン大管長を通して、日々モルモン經を読み、研究することによってもっとよく備えるように、と語っておられます。

セルヒオは、伝道に行きたいと思っていました。家から300キロも離れた大学で勉強をしていましたが、定期的に監督とステーキ部長の面接を受けるために、家に帰らなければなりませんでした。彼は、自分自身が伝道に行く資格がないと思っていました。心が汚れていると言うのです。自分の思いを悪い方向へ向けるものを、大学の中であまりにもたくさん見聞きしたからというのです。セルヒオは、毎朝学校へ行く前にモルモン經を読むようにとの課題を与えられました。それを守った彼は、数ヵ月の内に自分の思いをコントロールすることができるようになりました。指導者たちも、彼が伝道に出るのにふさわしいと思うようになりました。こうして彼は宣教師となり、すばらしい働きをしたのです。

教会の指導者たちはいつでも、皆さんの両親と同じように、準備する皆さんを助けようと待っています。ある若者の両親は、よい音楽を聞くように教えました。そして親子で、ボイド・K・パッカー長老の「価値ある音楽—価値ある思い」というスライドを見ました。その若者は、自分の部屋に戻って、持っていたレコードを整理し、ふさわしくないものをごみ箱に捨てました。こうして、従順の律法に従うことが、この若者の栄誉ある伝道に赴く助けとなつたのです。

イエスは復活後、40日の間教えを説かれ、まさに昇天される間際に弟子たちにこのように言われました。「あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」（使徒1：8）今日、主の弟子であり、主の神権をいただいて

いる私たちは、主の証人です。主ご自身を、主の復活を、主の教会を、主の予言者と使徒を証しなければなりません。なぜなら、「誠に主の声はすべての人々に及ぶものなれば、一人ものがるる者なし。目として見ざるはなく、耳として聞かざるはなく、心として刺し貫かれざるはなし。……而して、この末の世にわが選びたる弟子たちの口より、すべての人々に警めの声は及ばん」(教義と聖約1：2，4)と言われているからです。

イエスはエルサレムにしばらくおられた後、アメリカ大陸を訪れ、なぜ主がこの地上に来られたかを、次のように人々に語されました。「まずわが父われをつかわしたまいたれば、われは父のみこころを行わんとてこの世に来れり。」

(IIIニーファイ27：13) 主は模範を示されたのです。アブラハムの書3章25節には、このように書かれています。「而して、これによりて彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。」今、天父と御子は、予言者を通じて、全世界に対しイエス・キリストの証人となり、福音を宣べ伝えるようにと皆さん一人一人に願っておられるのです。

救い主は、この世におられるとき、従順について最高の模範を私たちに示してくださいました。主はニーファイ人にこう語っておられます。「われが十字架にかけられて、後にあらゆる人々をわれに引きよせんがためなり。また人がわれを十字架に上げたる故に、今度は御父が世の中の人を必ずひき上げて、……裁判するためにわが前に立たせたもう。」(IIIニーファイ27：14)さて、私たちは教会員として、若いアルマが言ったように、世界の人々にこう告げる責任があります。「天下の万民は男女を問わず、あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる國語の民、あらゆる人々にいたるまでみな新に生れざるべから(す)。」(モーサヤ27：25)すべての人々は、福音に従って生きることができるよう、福音を聞く必要があります。なぜならば、「清からざるもののは御父の王国に入ることを得(ない)」(IIIニーファイ27：19)からです。それゆえに、私たには悔い改めが必要であり、主イエス・キリストを信じる信仰を持ち、バプテスマを受け、聖霊を受け、終わりまで忠実である必要があるのです。

ときどき、この業は自分には関係がない、あるいは自分にはできないと思う人がいるかもしれません。若いニーファイのことを考えてみてください。(Iニーファイ3：5－7参照) 大変だからといって不平を言うのはやめましょう。

主があなたを召されたのです。主が道を開いてくださるでしょう。あるいは「われは年行かぬ者に過ぎず、すべての人々われを悪む。われは口重き者なればなり……と主に呼びかけ、「行きてわが命じたる如く為せ。」と答えをいただいたエノクのことを考えてください。(モーセ6：31-32)

アルゼンチンのメンドーサに住むカルロス・アグエロはフランスのパリで伝道するように召されました。彼は自分の住んでいる町からめったに出たことはありませんでした。フランス語も知りませんでした。けれども、つぶやくことをせずニーファイのように出発しました。フランスに着いてみると、伝道部長はスペイン語が話せませんでした。さらに、他の宣教師の中にもスペイン語の話せる者はおらず、皆英語かフランス語しか話せません。ゾーン大会もそのほかの指示も、すべて英語で行なわれますが、アグエロ長老は英語もできません。他の宣教師たちは皆英語ができます。アグエロ長老は勉強し、祈りました。主に嘆願し、伝道部長や同僚宣教師たちに助けを求め、何ヵ月もかかりましたが、彼はとうとうフランス語と英語を修得しました。こうして伝道を立派に終えた彼は、現在アルゼンチンのメンドーサの教会の集会で、また自分の仕事で、学んだ英語を役立てています。

主は、私たちが従順なときいつでも祝福をくださいます。しかし、その祝福は主の方法によって与えられるのです。エジプトへ売られた若いヨセフのことを考えてください。彼は、自分の見た夢を親、兄弟に話しました。その夢の故に兄弟たちは彼に腹を立て、彼らはヨセフを隊商に売りました。エジプトでヨセフはポテパルの家で働き、ポテパルの妻の誘惑を退けましたが、その結果無実の罪で投獄されてしまいました。(創世39参照)彼は祝福を受けたでしょうか。私たちは、主の戒めを守るとき、主の祝福を受けます。ヨセフはパロに次ぐ者となり、彼の家族を餓死から救いました。(創世41：42参照)何よりも、彼は「神のあらゆる賜の中最大なるもの」(教義と聖約14：7)である永遠の生命を得たのです。

私たちも、戒めを守ることによって、永遠の生命を受ける祝福にあずかります。そして私たには、「全世界に出で行き、一切の生くる者に福音を説き、わが汝らに与えたる権威を以て働き、御父と、子と、聖霊の名によりてバプテスマを施すべし。信じてバプテスマを受くる者は救わるべし」(教義と聖約68：8-9)との戒めが与えられているのです。□

エンブレム

デビー・ブリス・フォーダム



離

陸間近の飛行機の中で、やっと自分の座席を見つけて腰をおろした私は、ふと、私の隣りに座っている青年のジャケットの胸にブリガム・ヤング大学のエンブレムがついていることに気づきました。私は、ブリガム・ヤング大学は宗教が母体となっている学校であるということは知っていました。

私はモルモンではありませんでしたが、ずっと熱心なクリスチャンでした。しかし、イエス・キリストが、彼を信じる信者たちに崇拜されて、偉大な生涯をとげた偉大な教師のひとりであったというだけではなく、確かに神の御子であるという確信を得たのは、つい最近のことでした。その確信を得るために、私は、熱心に祈り、また真剣に聖書を読みました。聖霊の力により、イエスが確かに救い主キリストであるという証を得ることができたのは、つい2カ月前のことでした。

あるとき、私は、自分の属する教会に対してひどく幻滅を感じたことがあります。それは、教会の牧師が、イエス・キリストが今も生きているかどうかは、さほど重要ではなく、私たちがいかに彼の模範と教えから、互いに愛し合うことを学ぶかの方が重要であると述べるのを聞いたからです。イエス・キリストがこの世に生まれ、私たちのために死なれたということは、ただの歴史上の事実ではなく、もっと深い意味があるはずです。私は、もっと深くキリストとキリストが私のためにしてくださったことの意味について理解したいと思いました。

私は、隣りの座席に座っているモルモンの青年に話しかけてみました。そして彼が、これからアマチュアゴルフトーナメントに出場するのだということを知り、私たちは、ゴルフの話にしばらく夢中になりました。その青年は、将来、プロのゴルファーになるつもりだと話してくれました。

私が彼に話しかけたのは、このような世間話をするためではありませんでした。私は、彼の信じていることについて知りたいと強く思ったのです。私はその青年とかなり打ち解けたところで、思い切ってこう尋ねました。「あなたが、ブリガム・ヤング大学を選んだのは、ゴルフが強い学校だからですか。それとも、教会の教えを信じているからですか。」彼は、笑顔を見せてこう答えました。「確かにゴルフは強い学校です。でも私はゴルフ部の部員であると同時に、モルモンであることをとても誇りに思っています。」

「モルモンは、イエス・キリストを信じていますか。」私は、続けて尋ねました。彼は、私の顔を見つめながら、モルモン教会の正式名称は、末日聖徒イエス・キリスト教会

であるということを説明してくれました。そして末日聖徒イエス・キリスト教会は、今も、イエス・キリストご自身が、生ける予言者を通して、人々を導いておられるということを証してくれました。

私は、ますますモルモンについてもっとよく知りたいという思いにかられ、次々と彼に質問を浴びせました。私は、一般的モルモン教徒が、ただ、家族が信じているからという理由で自分も教会員として生活しているのか、それとも、一人一人がイエス・キリストに対する確固たる証を持っているのかを確かめたかったのです。彼の証を聞いていたうちに、この青年はモルモンの家庭に生まれていながら、彼自身、自分の証を得るために様々な努力をし、そしてイエス・キリストに対する証を得たということを知りました。

私は、今までの自分の聖書研究の中で、聖書の時代の人々の間にはあったが、少くとも、私が今まで集っていた教会では受け継がれていない、失われたいくつかの概念があるということを知っていました。私は、それらの概念について、モルモン教会ではどう考えているのかを知るために、この青年に尋ねてみることにしました。

「按手によって聖霊の賜が与えられるということを知っていますか。」その青年は、驚いた顔つきで、じっと私の顔を見つめて聞きました。「あなたは、なぜそのことを知っているのですか。」私は、聖書の中にそう書かれているからだと答えました。その青年は、「もちろん、聖霊の賜を信じています」と答えました。そして、キリストの時代の按手礼が、現代も行なわれていること、また神権が回復されたことについて、彼は熱心に話してくれました。

私は、この青年の話をもっともっと聞きたかったのですが、残念なことに飛行機は着陸態勢に入りました。

その青年は、「もし、もっと詳しく私たちの教会についてお知りになりたいならば、教会の宣教師をご紹介しますよ。宣教師はもっとわかりやすく教えてくれますから」と言ってくれました。

そして私は、すばらしい青年宣教師たちに会って間もなく、バプテスマを受けてイエス・キリストの真の教会の会員になりました。その日から6年の月日が流れましたが、私は今でも、飛行機の中で出会った青年に心から感謝しています。彼の胸についていたエンブレムが、私を救い主イエス・キリストの真実の教会へ導いてくれたのです。□

*デビー・ブリス・フォーダムは、現在フローレンス、サウスカロライナステーキ部のフローレンスワード部に所属している。

8月に 召された JMTC 第111期生 9人の名簿

S : ステーキ部, M : 伝道部, D : 地方部,
W : ワード部, B : 支部

左から1~9



〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉	〈名 前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 安田 義人	札幌S／旭川西W	岡山伝道部	6. 森田いく子	大阪堺S／三国ヶ丘W	神戸伝道部
2. 山崎ちひろ	東京南S／渋谷W	福岡伝道部	7. 緒方 康子	岡山M／宇部B	東京南伝道部
3. 西澤文恵	福岡M／八代B	大阪伝道部	8. 渡辺万里子	東京北S／越谷W	名古屋伝道部
4. 西城希美	大坂堺S／河内長野B	名古屋伝道部	9. 早川則子	札幌西S／室蘭W	東京北伝道部
5. 小野理恵	福岡S／藤崎W	仙台伝道部			

